

南国市埋蔵文化財報告書第14集

高知県南国市

金地遺跡

KANAZI

1992年3月

南国市教育委員会



SK2 土器出土状態

序

金地遺跡の立地する長岡台地には、その周辺部を含め、多数の遺跡が所在しそれとともに年々発掘調査も増加しております。今度、鈴江農機本社新築工事に伴い、埋蔵文化財への影響を受ける金地遺跡の範囲について緊急発掘調査を行いました。

発掘調査の結果、弥生時代及び平安・中世までの複合遺跡であることが明らかになりました。中でも竪穴住居址から多量の弥生土器が出土し、周辺に位置する同市東崎遺跡、土佐山田町ひびのき遺跡等との関連を考える上でも、貴重な資料を得ました。

本書は、その発掘調査の成果をまとめたものです。今後広く一般に活用され文化財保護及び学術研究の分野においても大いに役立つことを願うものであります。

最後に、調査にあたって御指導を戴きました吉原達生氏、並びに作業に従事されました皆様や、本調査に御協力を頂いた関係者の方々に厚く御礼を申し上げます。

平成4年3月

南国市教育長 森 実 啓 祐

例 言

1. 本書は、鈴江農機製作所(株)本社工場新築工事に伴う金地遺跡の緊急発掘調査報告書である。
2. 発掘調査は、南国市教育委員会が調査主体となり、平成2年3月5日から31日まで実施した。
3. 調査対象面積は約2,900㎡であり、調査面積は約1,200㎡である。
4. 発掘調査は、南国市教育委員会の依頼を受け、高知県教育委員会前文化振興課主事吉原達生、南国市教育委員会前社会教育課嘱託森淳子が担当した。本書の執筆・編集は吉原が行った。執筆に際しては岡本健児氏の御指導を得た。調査の事務・総括は、南国市教育委員会前社会教育課主事浜田清貴、また同課主幹岡崎聡一が行った。
5. 遺構については、S T (竪穴住居)、S B (掘立柱建物)、S K (土坑)、S D (溝)、P (柱穴)で標示した。
6. 調査及び報告書作成にあたっては、鈴江農機製作所(株)、小松建設(株)、連合設計事務所(株)、岩村農業協同組合、高知西高校考古学研究会等の協力を得た。また、出原恵三、松田直則、森田尚宏、前田光雄、廣田佳久、山本哲也各氏の協力を得た。記して深く謝意を表したい。
7. 測量では、佐々木土木設計事務所(有)の協力を得た。また、現地作業員並びに整理事業員の皆様の御援助に対し、記して深く謝意を表したい。
8. 出土遺物、その他の資料は、南国市教育委員会及び(財)高知県文化財団埋蔵文化財センターで保管している。

本文目次

第Ⅰ章 調査に至る経過	1
第Ⅱ章 遺跡の位置と歴史的環境	4
第Ⅲ章 調査区の概要と調査の方法	8
1. 調査区の概要	8
2. 調査の方法	8
第Ⅳ章 遺構と遺物	12
1. 弥生時代	12
2. 平安時代	16
第Ⅴ章 総括	19
1. 遺物について	19
2. 遺構について	20

図版目次

Fig. 1 南国市金地遺跡位置図	1
Fig. 2 周辺の遺跡分布図	2
Fig. 3 発掘調査区位置図	5
Fig. 4 発掘調査区周辺図	6
Fig. 5 発掘区セクション図	9
Fig. 6 遺構全体図	11
Fig. 7 ST1・ST2実測図	22
Fig. 8 SB1実測図	23
Fig. 9 SB2・SD1・SD2実測図	24
Fig. 10 SK1～4実測図	25
Fig. 11 ST1出土遺物	26
Fig. 12 〃	27
Fig. 13 〃	28
Fig. 14 〃	29

Fig. 15	S T 1 出土遺物	30
Fig. 16	〃	31
Fig. 17	〃	32
Fig. 18	〃	33
Fig. 19	〃	34
Fig. 20	S T 2 出土遺物	35
Fig. 21	S B 1 · S K 1 · S K 2 出土遺物	36
Fig. 22	S K 2 · S K 3 · S K 4 · P14 出土遺物	37
Fig. 23	S D 1 出土遺物	38

表 目 次

Tab. 1	周辺の遺跡分布表	3
Tab. 2	遺物観察表 (S T 1 出土遺物)	39
Tab. 3	〃 (〃)	40
Tab. 4	〃 (〃)	41
Tab. 5	〃 (〃)	42
Tab. 6	〃 (〃)	43
Tab. 7	〃 (〃)	44
Tab. 8	〃 (S T 1・2 出土遺物)	45
Tab. 9	〃 (S T 2, S B 1, S K 1・2 出土遺物)	46
Tab. 10	〃 (S K 2・3・4, P 14, S D 1 出土遺物)	47
Tab. 11	〃 (S D 1 出土遺物)	48

写真図版目次

PL. 1	調査前全景	49
PL. 2	遺構検出状態	50
PL. 3	調査区南壁セクション	51
PL. 4	S T 1 検出状態, S T 1 完掘状態	52
PL. 5	S T 2 検出状態, S T 2 完掘状態	53
PL. 6	S B 1・2 完掘状態, S K 1 完掘状態	54
PL. 7	S K 2 完掘状態, S K 4 完掘状態	55
PL. 8	S D 1 完掘状態, S D 2 完掘状態	56
PL. 9	S T 1 遺物出土状態	57
PL. 10	〃	58
PL. 11	S T 2 遺物出土状態	59
PL. 12	〃, S K 1 遺物出土状態	60
PL. 13	S K 2 遺物出土状態	61
PL. 14	〃, S K 4 遺物出土状態	62
PL. 15	S T 1 出土遺物	63
PL. 16	〃	64
PL. 17	S T 1・2 出土遺物	65
PL. 18	〃	66

PL. 19	ST 1 出土遺物	67
PL. 20	SK 1 ~ 3 出土遺物	68
PL. 21	ST 2, SB 1, SK 1, SD 1 出土遺物	69
PL. 22	SK 2 ~ 4 出土遺物	70
PL. 23	ST 1 出土遺物	71
PL. 24	〃	72
PL. 25	SK 2, ST 1 出土遺物	73
PL. 26	ST 1 出土遺物	74
PL. 27	〃	75
PL. 28	〃	76
PL. 29	ST 1, SK 2 · 3 出土遺物	77
PL. 30	ST 1 出土遺物	78
PL. 31	〃	79
PL. 32	ST 1, SK 2 · 3, P14 出土遺物	80

第 I 章 調査に至る経過

南国市金地に所在する「金地遺跡」は、昭和52年代より岩村農業協同組合の管理のもとで利用されていたグラウンドから、工事前のボーリング調査で土器片が発見され、急遽試掘することになった遺跡である。

工事は、南国市後免町の鈴江農機製作所(株)が、会社再建を軌道に乗せるため、経営規模に見合った工場改築を計画したものである。しかしながら、工事立地法の絡みで現在地での改築が難しく、郊外へ移転されることになった。その適地として「金地」が選定され、上述のボーリング調査を実施したのである。

試掘調査は、土器の発見に伴い、また周辺に遺跡が多く所在し、立地条件も良いことなどから、平成2年度2月16・17日に実施された。調査対象面積は約 2,900㎡で、対象範囲内に12カ所のトレンチを設定掘削し、遺跡の性格、範囲及び遺構・遺物の深度や残存状況を調査した。

その結果、トレンチ12カ所のうち6カ所より、住居跡・溝・柱穴と思われるもの及びピット群が確認された。遺物は、主に弥生土器片が出土し、同遺跡には弥生期の集落跡が所在する可能性を高めた。

こうして、工事によって影響を受ける範囲について、南国市教育委員会が調査主体となって、埋蔵文化財の記録保存を図ることを目的として緊急発掘調査（平成2年3月5日～31日間）が実施されることになった。

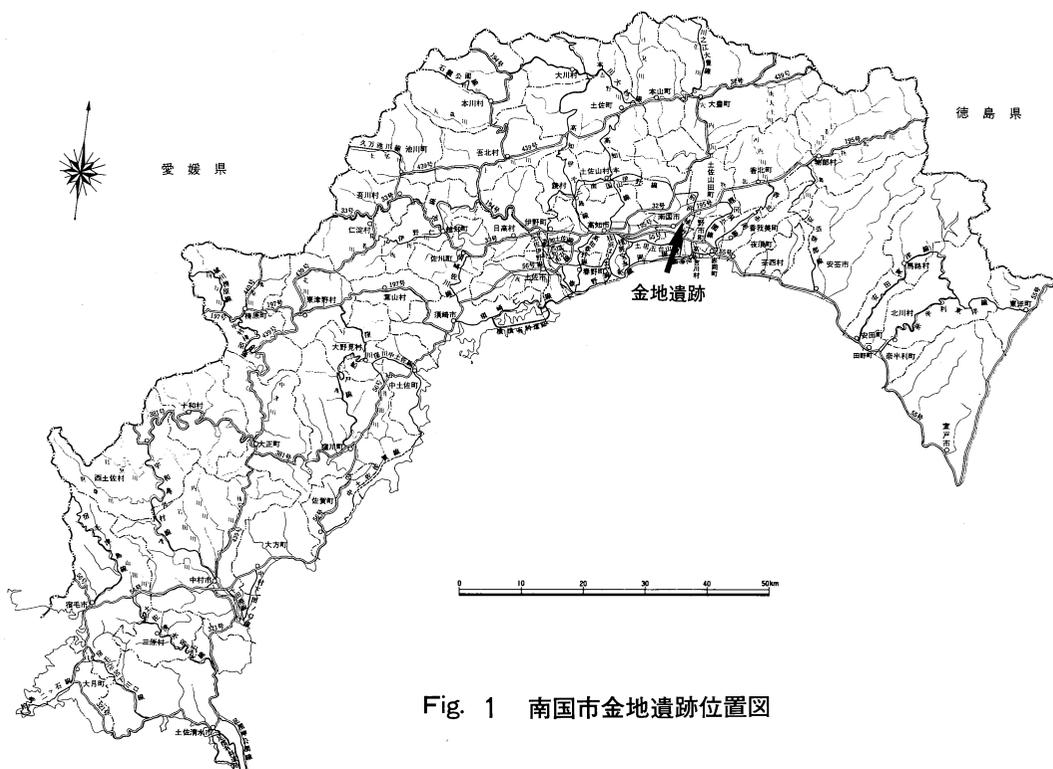


Fig. 1 南国市金地遺跡位置図



Fig. 2 周辺の遺跡分布図

★金地遺跡

No	遺跡名	時代	No	遺跡名	時代
1	片山土居城跡	中世	33	山田城跡	中世
2	田村遺跡群	縄文～近世	34	ひびのき遺跡	弥生～古墳
3	田村土居城跡	中世	35	大塚古墳	古墳
4	大湧関町田遺跡	弥生	36	楠目遺跡	弥生～平安
5	大篠遺跡	〃	37	稲荷前遺跡	弥生～近世
6	上細工瀬遺跡	〃	38	原遺跡	弥生～古墳
7	平杭遺跡	〃	39	高柳遺跡	弥生～中世
8	徳弘土居城跡	中世	40	雪ヶ峰城跡	中世
9	立田土居城跡	〃	41	林田遺跡	弥生～古墳
10	東崎遺跡	弥生～古墳	42	影山城跡	中世
11	五軒屋敷遺跡	〃	43	烏ヶ森遺跡	〃
12	岩村土居城跡	中世	44	龍河洞遺跡	弥生
13	大領遺跡	奈良～平安	45	小山谷古墳	古墳
14	土佐国分寺跡	弥生～近世	46	白岩の窯跡	平安
15	土佐国府跡	〃	47	東佐古遺跡	弥生
16	比江廃寺跡	古墳	48	龜山窯跡	平安
17	三添遺跡	弥生～近世	49	父養寺古墳	古墳
18	瀨ノ上遺跡	弥生～平安	50	竹ノ内古墳	〃
19	三島遺跡	弥生	51	大谷城跡	中世
20	山田三ツ又東遺跡	弥生～近世	52	笹ヶ峰遺跡	弥生
21	久礼田古墳	古墳	53	大崎山古墳	古墳
22	中山田古墳	〃	54	深淵遺跡	縄文～近世
23	高松古墳	〃	55	深淵城跡	中世
24	植田古墳	〃	56	西野遺跡群	弥生・古墳・平安
25	久次西久保古墳	〃	57	北地遺跡	弥生
26	田村氏西北方古墳	〃	58	下井遺跡	平安
27	新改古墳	〃	59	曾我遺跡	弥生～中世
28	タンガン窯跡	〃	60	下分遠崎遺跡	弥生
29	植村城跡	中世	61	十万遺跡	縄文～近世
30	前行古墳群	古墳	62	香宗城跡	中世
31	伏原遺跡	弥生～平安	63	須留田城跡	〃
32	ひびのきサウジ遺跡	弥生～近世			

Tab. 1 周辺の遺跡分布表



発掘作業風景

第Ⅱ章 遺跡の位置と歴史的環境

金地遺跡は、南国市金地字北籠西840-2に所在する。この地は南四国最大の穀倉地帯である香長平野のほぼ中央部に位置し、工事前は、一般のグラウンドとして土地利用がなされていた。北西約800mにはJR土佐長岡駅があり、南側を舟入川が流れている。また東部には、県下三大河川の1つである物部川が四国山地の三嶺を水源として、峡谷を縫うように西流し、中流域では所々によく発達した河岸段丘を形成している。金地遺跡は、古物部川が下流域で形成した古期扇状地を呈す長岡台地の南側から部分的に張り出す小段丘上に立地する。

周辺の遺跡には、高知県東部地域の母村的な大集落である田村遺跡群⁽¹⁾をはじめ、鉾尾、二彩陶器など官衙関連遺物が出土した深淵遺跡⁽²⁾などが挙げられる。特に金地遺跡の立地する長岡台地及びその周辺部では、遺跡数が急増し、従来から指摘されているように、県下東部地域では、弥生時代後期末になると、集落の中心は田村から長岡台地及びその周辺部に移動してゆくような様相を呈している。香美郡土佐山田町のひびのき遺跡⁽⁴⁾・ひびのきサウジ遺跡⁽⁵⁾・林田遺跡⁽⁶⁾・南国市の三島遺跡・五軒屋敷遺跡⁽⁷⁾・東崎遺跡等での竪穴住居址数棟等の検出がそれを物語る。

しかしながら、各遺跡の調査は範囲が限られており、拠点集落の確認とともに、各遺跡の関連性及び拡がりの可能性を踏まえ、当地域の全体的な把握が今後の課題である。

(註)

- (1) 高知県教育委員会『高知空港拡張整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書田村遺跡群』1986年
- (2) 野市町教育委員会『深淵遺跡発掘調査報告書』1989年
- (3) 南国市教育委員会『西見当遺跡発掘調査報告書』1983年
- (4) 土佐山田町教育委員会『高知県ひびのき遺跡』1977年
- (5) 土佐山田町教育委員会『ひびのきサウジ遺跡発掘調査報告書』1990年
- (6) 土佐山田町教育委員会『林田遺跡発掘調査報告書』1985年
- (7) 高知県教育委員会『五軒屋敷遺跡調査報告書』1984年

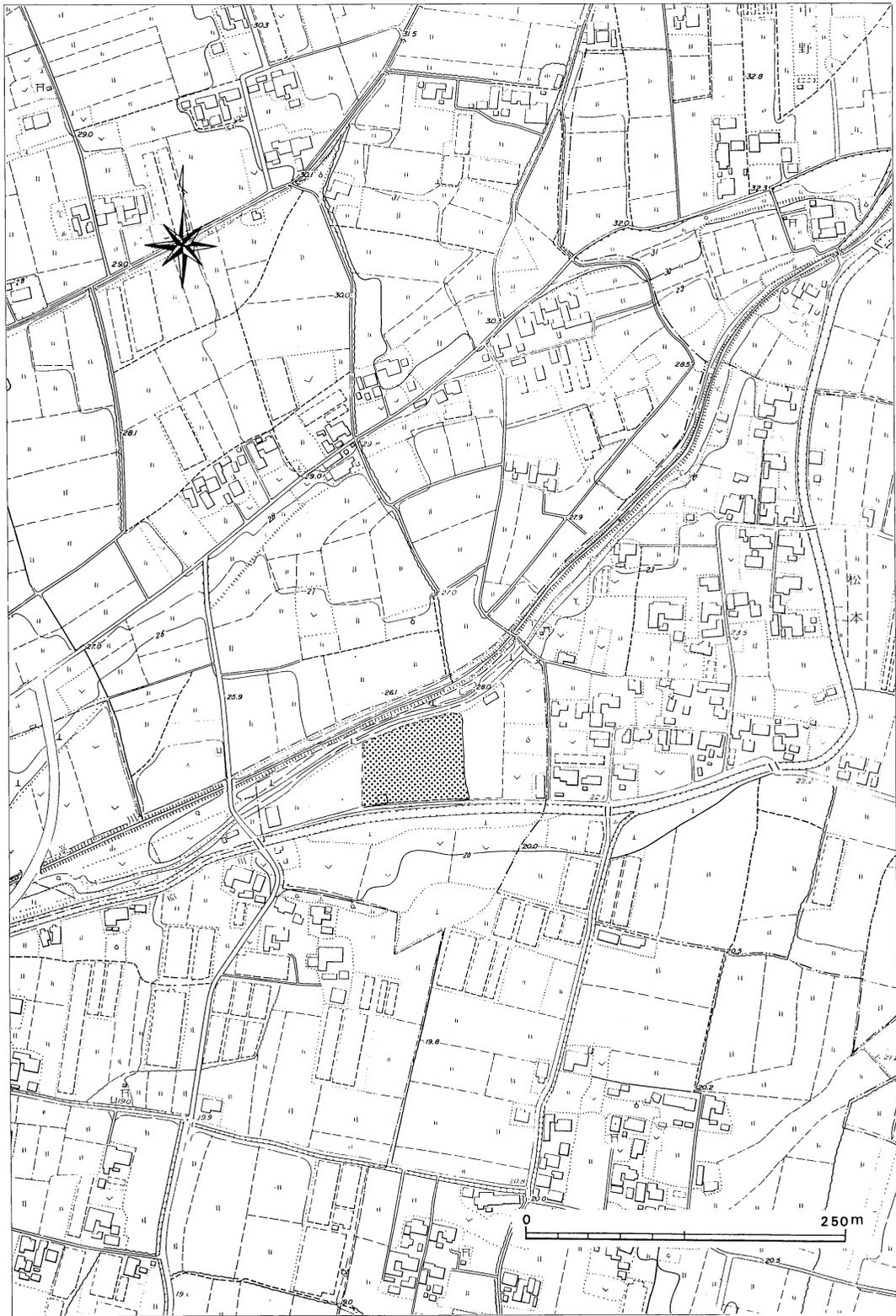
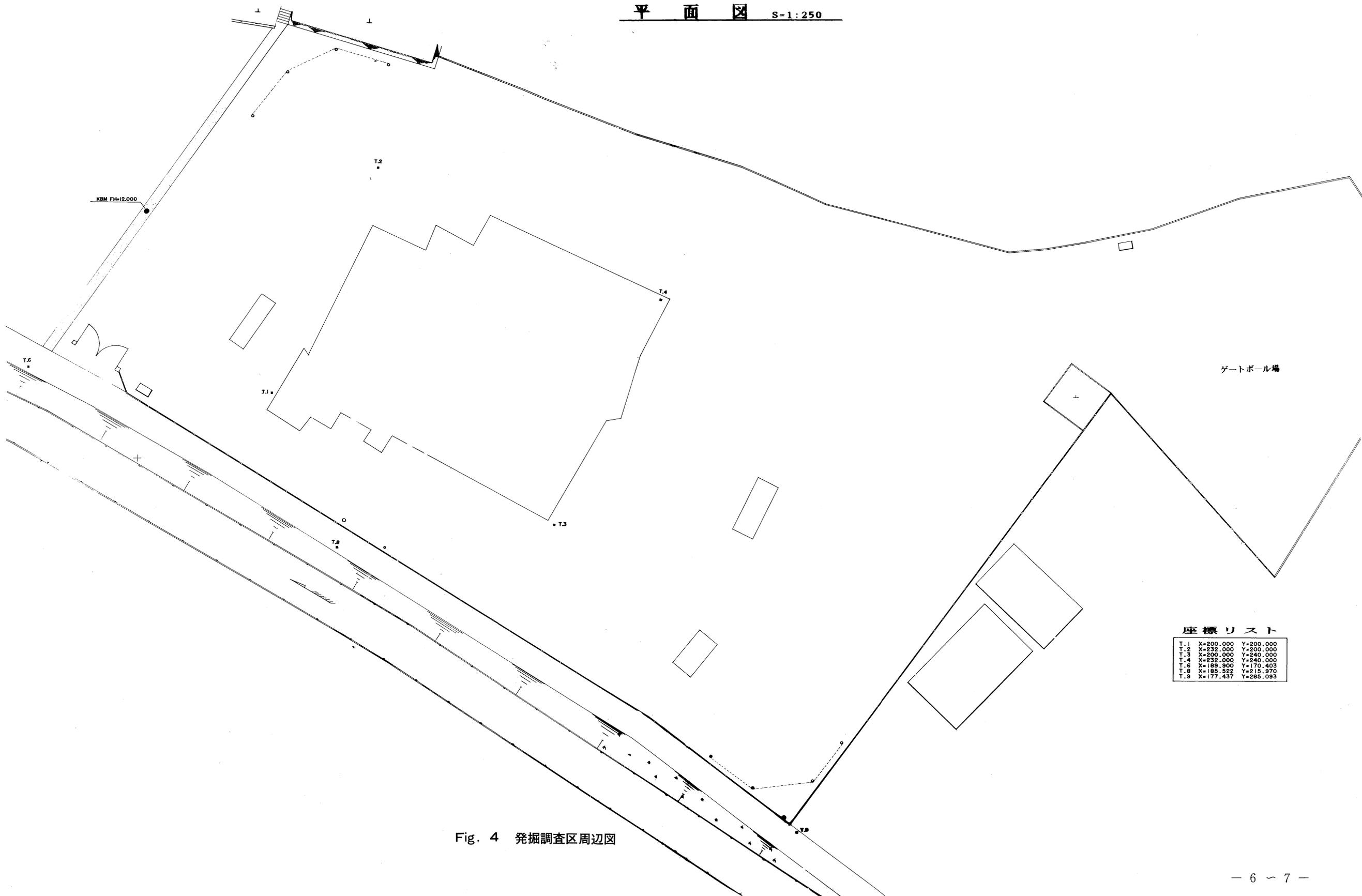


Fig . 3 発掘調査区位置図



座標リスト

T.1	X=200.000	Y=200.000
T.2	X=232.000	Y=200.000
T.3	X=200.000	Y=240.000
T.4	X=232.000	Y=240.000
T.6	X=189.900	Y=170.403
T.8	X=185.522	Y=215.370
T.9	X=177.437	Y=285.093

Fig. 4 発掘調査区周辺図

第三章 調査区の概要と調査の方法

1 調査区の概要

今回の発掘調査によって検出された遺構は、竪穴住居2棟、掘立柱建物2棟、土坑4基、溝2条、ピット及び柱穴群である。遺物は、弥生土器を中心に土師器、須恵器、瓦質土器、石器等が出土した。中でもベッド状遺構を有す竪穴住居址（ST1）から多量の弥生土器がみられた。また土坑（SK2）からは、意図的に重ねて埋め込んだと考えられる弥生土器が出土した。

調査区の基本層序は、第Ⅰ層：表土層、第Ⅱ層：黒褐色粘質土、第Ⅲ層：黒色粘質土、第Ⅳ層：茶褐色粘質土、第Ⅴ層：黄褐色粘質土（地山）である。表土の層厚は20～70cm程で、南西寄りで堆積が厚くなる。第Ⅱ・Ⅲ層は、遺物包含層であるが、前者は大部分が既に削平を受けており、第Ⅰ層と同様に砂礫の混入が目立った。遺構は、第Ⅳ層上面で検出された。

なお、同調査対象地には、昭和41年7月～昭和48年12月まで養豚場が所在した記録があり、ゆえに同遺跡は、基盤整備の影響をかなり受けており、遺構の攪乱が顕著であった。また出土遺物の大半が破損し、土器の復元作業には困難を極めた。

2 調査の方法

発掘調査の実施にあたっては、試掘調査における各トレンチを繋ぐかたちで帯状のトレンチを設定し、ユンボにより表土を除去した後、手掘りで遺構検出を行った。また、調査対象区全体に4×4mのグリッドを設定し、南北ラインはアルファベット1～8、東西ラインは数字A～Jまで順次付し、A1、A2という具合にグリッドを呼称した。（Fig. 6 参照）なお、方位については磁北方向を基準線とした。



発掘作業風景

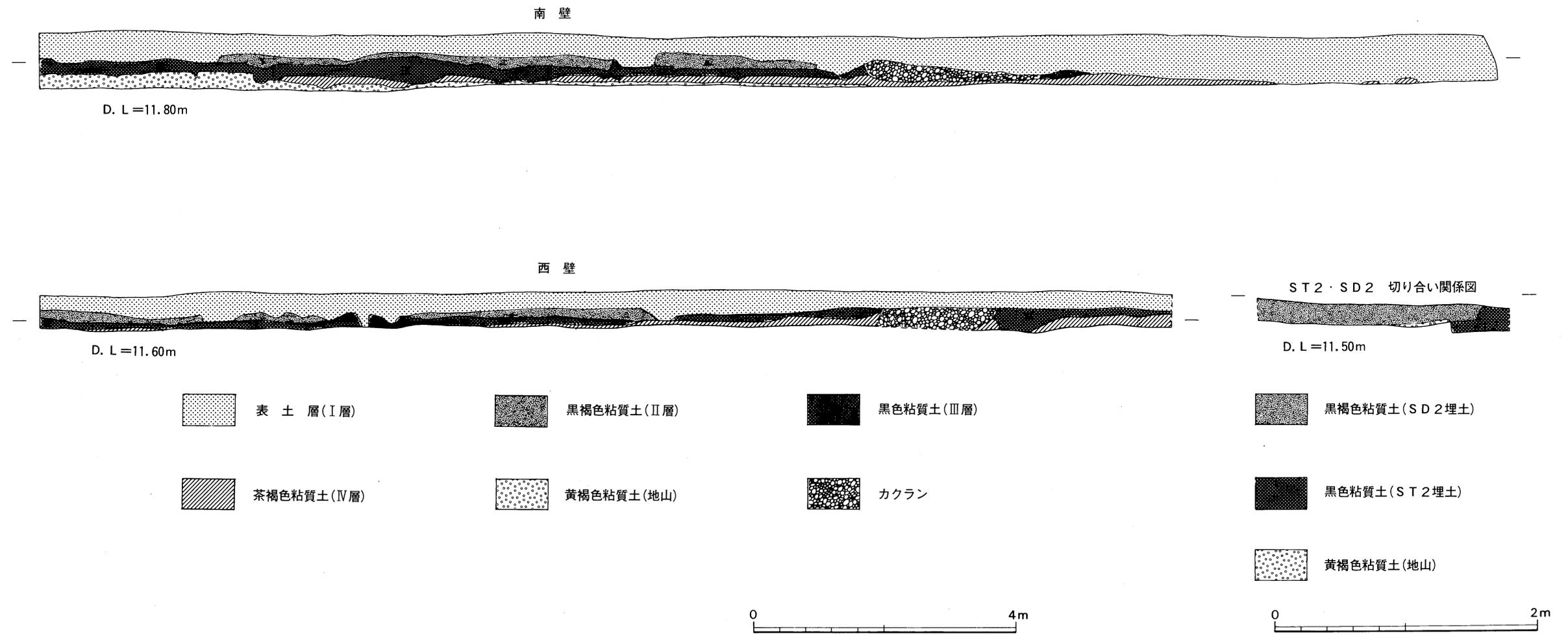


Fig. 5 発掘区セクション図

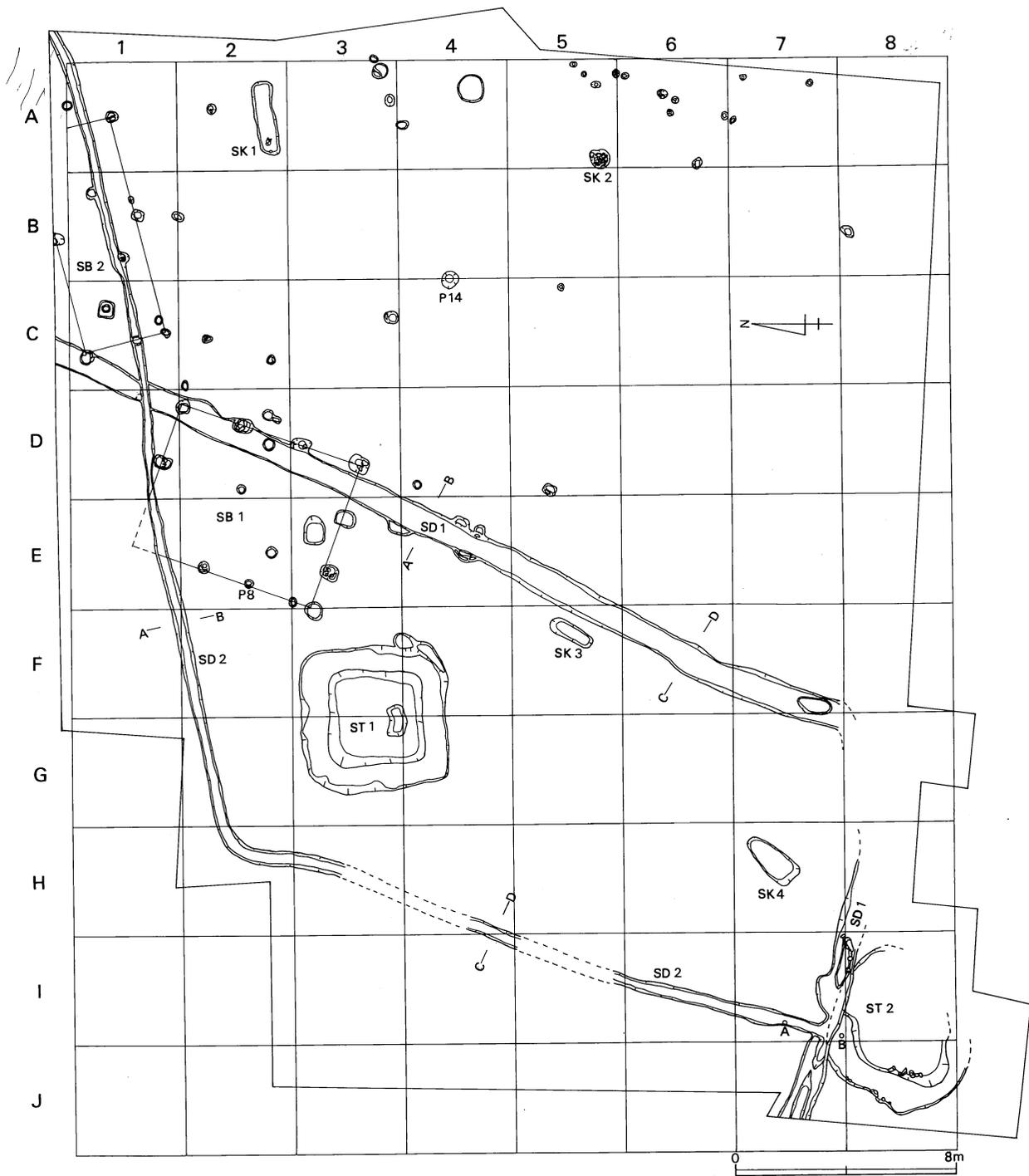


Fig. 6 遺構全体図

第Ⅳ章 遺構と遺物

1. 弥生時代

弥生時代の遺構として竪穴住居2棟、土坑3基、ピット数個を検出した。遺構の組合せやその変遷等については、次章に譲る。

竪穴住居

ST1 (Fig. 7)

F・G-3・4の4つのグリッドにまたがる。平面プランは隅丸方形を呈し、ベッド状遺構をもつ。一辺5.30m、深さ43~55cm、面積は28.09㎡を測る。主軸方向はN-4°-Wである。壁は、ほぼ平坦な床面から急角度で斜に立ちあがる。ベッド状遺構は地山成形で、四辺を全周する。南部は緩やかな傾斜で床面に下ることから出入口の可能性を有する。ベッド状遺構の最大部の幅は1.08m、西側の狭い部分で0.55mを測る。検出面からの深さは16~30cm、ベッド状遺構部と住居面との高さの差は17.1cmである。中央ピットの平面プランは隅丸長方形を呈し、長辺1.16m、短辺0.54m、深さは8.4~15.4cmを測る。埋土は、Ⅰ層：黒色粘質土、Ⅱ層：茶褐色粘質土である。遺物は、礫がかなり混入していたものの、多量の弥生土器が出土した。

出土遺物 (Fig. 11-19)

壺 (1~18)

1~3の口縁部は、漏斗状に外反しているのに対し、4~7はラッパ状に大きく開く。1の頸部外面には扁平の粘土帯を貼付し、さらにその上に左下がりの列点文を配している。3の口縁部は外方へ強くつまみ出され、外面には指頭圧痕が顕著に観察できる。4~7の内外面にはハケ調整を施している。4・6は荒いハケ原体によるハケ調整を施しているのに対し、5・7は細かいハケ原体によるハケ調整を施す。8~16は二重口縁である。いずれも口唇部は外傾する。8の口縁部は、若干丸味を帯びて内傾する。口縁端部は僅かに凹み、口唇部は丸くおさまる。9~11の口縁部は、外反気味に上がった後、稜をもって内傾する。12~14の口縁部は、外反した後、稜をもって内湾気味に屈曲して上方へほぼ直立する。14の上口縁の外面には、ヘラによる線描き鋸歯文がみられる。14・15の口唇部は上下に若干拡張している。手法は、いずれも内外面共にハケ及びヨコナデを施し、内面の稜線を部分的に指頭によりナデ消している。17・18は共に最大径を胴部中位に有し、叩き調整を施す。17は、その後右下がりのハケ調整を施し、さらに中位はヘラ磨き、下半はナデ調整を施す。内面はハケ調整後ナデている。18は壺棺の可能性が高い。外面は水平の叩き調整、内面は右下がりのハケ調整を行った後、両面共にナデている。

甕 (19~69)

19~24の口縁部は、いずれも「く」の字状に外反する。口縁部外面は、19~22が水平に叩いた後ナデ消しているのに対し、23はハケ原体の荒いタテハケ後、ヨコナデを施す。24は丁寧なタ

テハケを施す。25～27の口縁部は、肩の張らない上胴部から緩やかに外反するのに対し、28は丸味を帯びて外反する。29の胴部は球形を呈し、外面は叩き調整後、部分的にハケ調整を施す。内面はハケ調整後、タテナデを行う。30～33・35は、平底から内湾して立ち上がり、口縁部は「く」の字状に屈曲して外反する。30～36の胴部外面は、すべて叩き調整を施す。30～32は、その後下半をハケ調整を行うのに対し、33・34はナデている。35は叩き調整後ナデ、さらに下半をハケ調整で仕上げている。36は叩き調整後、ハケ調整、さらにナデ調整を行う。31～33の内面は、ハケ調整を施し、下半はナデている。37～64は、いずれも甕の底部である。外面は、叩き調整のみのもの(37・39)、叩き調整後ハケ調整を施すもの(38・40～51・57～61)、叩き調整後ナデ調整を施すもの(52～56)、ナデ調整のみのもの(62)、ヘラ磨きを行うもの(63・64)にそれぞれ分けられる。内面は、ハケ調整後ナデ調整を施すもの(38・42～44・46～48・50・52・54・59～63)が多く、その他にハケ調整のみ(49・51)、ナデ調整のみ(39・41・53・55～58・64)、ハケ→ナデ→ヘラ削りの順で仕上げるもの(40)、ヘラ磨きを入念に行うもの(45)がある。65～69の底部外面には、木葉圧痕が顕著にみられる。

甕 (71～76)

それぞれ底部には焼成前に穿った孔を認める。外面は、73を除き、いずれも叩き調整後ナデている。内面は、71と76がハケ調整後、孔のまわりを中心にナデている以外は、いずれもナデ調整を施す。

鉢 (70・77～106)

77・78は低脚を有し、後者はつまみ出しによる。78の外面は、82～92と同様に、叩き調整後ナデている。これに対し、94～104・106はナデ調整のみ施す。内面の手法は、全体的に多様である。それぞれハケ調整のもの(81・82・84・95・97～99)、ハケ調整後底部周辺を主にナデるもの(80・83・85・94・96・100・101)、ナデ調整のもの(77・78・86・102・106)、ハケ調整後丁寧なヘラ磨きを行うもの(88・91・104)、ナデ調整後底部周辺をヘラ磨きするもの(89)、ヘラ磨きのみ(90・92・93・105)、ヘラ削りをナデ消すもの(103)があげられる。

手握ね土器 (107)

僅かに平底をとどめる底部から立ち上がる。内外面共にナデ調整を施し、部分的に指頭圧痕を残す。

土製支脚 (108)

内外面共にナデ調整を施し、指頭圧痕が顕著にみられる。

石庖丁 (109)

全長8.2cm、全幅5.2cm、全厚1.4cm、重量80gを測る。石質は砂岩で、両側に抉り痕を認める。

ST2 (Fig. 7)

I・J-7・8の4つのグリッドにまたがる。北側は溝(SD1)に切られ、南東部は攪乱を受け明確ではないが、ほぼ円形の平面プランを呈す。ST1と同様にベッド状遺構をもつ。推定直径5.40m、検出面からの深さは18～40cmを測る。ベッド状遺構は地山成形で、北側と西

側が広くつくられ、南側は攪乱を受けている。残りの良いところで幅1.06m、深さ10~24cmを測り、ベッド状遺構部と住居面との高さの差は24.1cmである。床面から柱穴は確認できなかった。埋土は、Ⅰ層：黒色粘質土、Ⅱ層：茶褐色粘質土である。遺物は、弥生土器壺・鉢等が北東部に集中してみられた。

出土遺物 (Fig. 20)

壺 (110・111)

110の口縁部は漏斗状に外反し、口縁端部は下方に肥厚する。口唇部は外傾して面をなし、左下がりの列点文を配す。内外面共にハケ調整を施し、口縁端部はよくナデている。111は球状の胴部上端から口縁部がラツバ状に大きく外反し、口縁端部は下方に肥厚する。口唇部は面をなし、波状文がみられる。外面は、口縁部を左下がりの丁寧なハケ調整、頸部をナデ調整、胴部を叩き調整後右下がりの丁寧なハケ調整で仕上げる。内面は、口縁部及び胴部中位を右下がりのハケ調整をナデ消し、胴部上半を入念にナデている。

甕 (112~119)

112の口縁部は漏斗状に開く。口縁端部は肥厚し、口唇部はほぼ丸くおさまる。頸部外面にタテハケを残す。113の口縁部は「く」の字状に外反し、口唇部は外傾して面をなす。外面は叩き調整後ハケ調整を施し、内面は右下がりのハケ調整後ナデている。114は、肩の張らない上胴部から緩やかに屈曲して口縁端部で外反する。口唇部は外傾して面をなす。外面は叩き調整を、内面は右下がりの丁寧なハケ調整を施す。115~119は平底を有す。118・119の外面は、叩き調整後右下がりのハケ調整を施し、内面は両者共ナデ調整を行う。

鉢 (120・121)

120は丸味を帯びて立ち上がり、口唇部は内傾して丸くおさまる。外面は叩き調整後ハケ調整、内面は右下がりのハケ調整を施す。121は小型の鉢で、丸味を帯びた底部から内湾して立ち上がる。外面に僅かに叩き目を残す他は、摩耗が著しく観察不可能である。

砥石 (122)

石質は砂岩で、全長180cm、全幅8.0cm、全厚4.4cm、重量795gを測る。使用面を2ヵ所認める。

土坑

S K 1 (Fig. 10)

A 2に位置する。平面プランは隅丸長方形を呈し、長辺2.70m、短辺0.75m、深さ25~32cm、長軸方向はN-83°-Eを測る。断面は逆台形で、埋土は黒色粘質土の単純一層である。遺物は弥生土器甕・鉢等が出土した。

出土遺物 (Fig. 21)

甕 (124・125)

124・125共に口縁部は「く」の字状に外反し、口唇部は凹状の面をなす。124の外面は、叩き調整後ナデを行う。内面は、口縁部を右下がりのハケ調整、胴部上半をハケ調整後ナデを行

う。125の外表面は、水平の叩き調整後、下半を丁寧にナデている。内表面は、口縁部及び胴部上端に右下がりのハケ調整、以下タテナデを入念に施す。

鉢 (126)

口縁部は如意状に外反し、口唇部は丸くおさまる。内外表面共にハケ調整を施し、内表面はさらにハケ目をナデ消す。

手捏ね土器 (127)

丸底気味の底部から内湾して立ち上がる。外表面は右下がりのハケ調整、内表面には指頭圧痕が残る。

SK 2 (Fig. 10)

A 5に位置する。平面プランはほぼ円形を呈し、径70cm、検出面からの深さは29.7cmを測る。断面は逆台形をなし、埋土は黒色粘質土の単純一層である。遺物は、重なり合った状態で弥生土器壺・甕等が出土した。

出土遺物 (Fig. 21・22)

壺 (128)

壺棺の可能性を有す。僅かに残る平底から内湾して立ち上がり頸部に至る。胴部中位に最大径を有す。外表面は右下がりの叩き調整後、荒いハケ原体によるハケ調整を施す。内表面はハケ調整をナデ消す。

甕 (129~135)

129は、尖底気味の底部から内湾して立ち上がる。口縁部は若干丸味を帯びて外反し、口唇部は外傾して面をなす。外表面は叩き調整後、下半はハケ調整を施す。内表面は、口縁端部にヨコハケ、以下右下がりのハケ調整を施し、さらにハケ目をナデ消す。130~135は平底をとどめ、内湾して立ち上がる。130・131の外表面は、口縁部を叩き調整後ナデて、胴部を水平の叩き調整後、下半はタテハケを施す。内表面は、両者共に右下がりのハケ調整をナデ消す。132の外表面は、やや右下がりの叩き調整後、下半には荒いハケ原体によるハケ調整を施す。これに対し内表面は、細い原体によるハケ調整を施す。133・134の外表面は、叩き調整後ナデる。さらに後者の下半には、右下がりのナデ調整を行う。内表面は、両者共にナデている。135は、外表面を幅の広い叩き調整で仕上げ、底部中心にナデ調整がみられる。内表面はハケ調整後、左下がりのナデ調整を行う。

甗 (136)

平底から内湾して立ち上がり、底部には焼成前に穿った孔を認める。外表面は叩き調整後ハケ調整を施し、内表面は左下がりのナデ調整を入念に行う。

鉢 (137~139)

底部はそれぞれ、137は突出気味、138は丸底気味、139は平底をとどめて、内湾して立ち上がる。137の口縁部外表面は、右下がりのハケ調整を施す。また粘土帯接合痕を入念にナデ消している。内表面は口縁部に丁寧なハケ調整、以下ナデている。138は、口縁部外表面に入念なヨコナデを認める。内表面は右下がりのハケ調整をナデ消す。139は内外表面共に摩耗が著しいが、外表面に右下

がりのハケ調整をとどめる。

SK 3 (Fig. 10)

H 7に位置する。平面プランは隅丸長方形を呈し、長辺2.18m、短辺0.95m、深さ24.7cm、長軸方向はN-41.5°-Eを測る。断面は逆台形で、埋土は黒色粘質土の単純一層である。遺物は、弥生土器壺・甕等が出土した。

出土遺物 (Fig. 22)

甕 (140~145)

140の口縁部は、肩の張らない上胴部から「く」の字状に強く屈曲して外反する。外面は左下がりの叩き調整、さらに頸部にはナデを行う。内面は、荒いハケ原体による右下がりのハケ調整を施し、以下ナデ調整を行う。141は平底から内湾気味に立ち上がり、口縁部は若干丸味をもって外反する。外面は左下がりの叩き調整後ナデで、さらに下半には左下がりのハケ調整を施す。口縁部内面はハケ調整後ナデ、以下タテナデを行う。142は平底から内湾気味に立ち上がり、外面は叩き調整後、内面はハケ調整後、内外面共にナデている。143は突出気味の底部から内湾気味に立ち上がる。外面は水平に叩き、内面は右下がりのハケ調整をナデ消す。

鉢 (144・145)

144は平底から丸味を帯びて立ち上がる。内外面共に摩耗が著しいが、底部内面はユビオサエで成形する。145は丸底気味の底部から内湾して直立に立ち上がる。内外面共に指頭圧痕を残す。

ピット

P 14 (Fig. 6)

B・C-4に位置する。平面プランは円形を呈し、径71cm、深さ32cmを測る。断面は逆台形で、埋土は黒色粘質土の単純一層である。遺物は、弥生土器甕等が出土した。

出土遺物 (Fig. 22)

甕 (147・148)

147・148共に、口縁部は「く」の字状に屈曲して外反し、口縁部及び頸部内面は右下がりのハケ調整後ナデている。

2. 平安時代

平安時代の遺構として掘立柱建物2棟、土坑1基、溝2条及びピット数個を検出した。遺構の組合せやその変遷等については、次章に譲る。

掘立柱建物

SB 1 (Fig. 8)

D・E・F-1~3にまたがる。建物は、桁行3間(7.00m)×梁間3間(5.60m)のほぼ南棟で、棟方向はN-19°-Eである。柱穴の平面は、隅丸方形及び楕円形を呈す。柱穴は、大きさがしっかりしているもので長径75cm、深さ41.3cmを測る。柱間距離は、桁行で1.75~2.65m、梁間で1.45~2.25mとなっている。建物の北西部は、攪乱を受け不明である。埋土は黒褐

色粘質土である。遺物は柱穴（P 8）より土師器等が出土した。

出土遺物 (Fig. 21)

土師器 (123)

ベタ高台を有す。底部外面には糸切り痕がみられる。

S B 2 (Fig. 9)

A・B・C-1にまたがる。建物は、桁行2間（8.25m）×梁間1間（3.1m）の東西棟で、棟方向はN-75.5°-Eである。柱穴の平面は楕円形を呈し、径35~55cmを測る。これらの検出面からの深さは、10.8~34.3cmである。柱間距離は、桁行で3.75~4.5mとなっている。建物の北東部は、調査区外であるため未調査である。埋土は黒褐色粘質土である。出土遺物は少量で、図示できるものはなかった。

土坑

S K 4 (Fig. 10)

F-5に位置する。平面プランは隅丸方形を呈し、長辺1.68m、短辺0.55m、深さ12.5~15.1cm、長軸方向はN-28.5°-Eを測る。断面は浅い逆台形で、埋土は黒褐色粘質土の単純一層である。遺物は骨壺1点が出土した。

出土遺物 (Fig. 22)

骨壺 (146)

須恵質である。中央部が僅かに凹む平底から直立気味に立ち上がり、上胴部で丸味をもって屈曲し頸部に至る。外面にはロクロ目が顕著に残り、内面は粘土紐巻上げ痕を入念にナデで調整している。

溝

S D 1 (Fig. 9)

調査区中央部をほぼ南北に走る溝である。南西寄りで攪乱を受け消滅するが、さらに西へ屈曲し延びるものと考えられる。また、西南部で住居址（S T 2）を切っている。規模は、長さ南北約31.50m、東西約10.98m、幅0.7~1.15m、深さ6.8~17.1cmを測る。主軸方向はN-26.3°-Eである。断面は舟底形を呈し、埋土は黒褐色粘質土の単純一層である。遺物は、須恵器、土師器、瓦質土器等が出土した。

出土遺物 (Fig. 23)

須恵器 (149~152)

149は杯蓋で、平坦な頂部をなし、口縁部を僅かに下方へつまみ出す。口唇部は丸くおさまる。口縁端部内外面には、強いヨコナデがみられる。150は壺の口縁部である。口縁端部は上下に肥厚して、口唇部は幅広い面をなす。151は甕の口縁部で、漏斗状に外反している。口唇部は外傾して面をなす。152は杯の底部で、平底から内湾気味に立ち上がる。150~152の内外面には、いずれもロクロによるナデが残る。

瓦質土器 (153~157)

153~157は、いずれも鍋である。153・154の口縁部は内傾し、口縁端部下には凸帯を貼付する。両者共に器面の摩耗が著しいが、外面にはヨコナデがみられる。155~157は脚部で、いずれも断面は円形を呈し、それぞれ155は2.5cm、156は2.75cm、157は2.6cmを測る。

SD 2 (Fig. 9)

調査区の北側をほぼ東西を走る溝で、北西寄りで屈曲し、部分的に攪乱を受けながら南へ延びSD 1と直交する。規模は、長さ東西約31m、南北約22m、幅18~60cm、深さ16.8~29.4cmを測る。主軸方向はN-77.5°-Eである。断面は逆台形を呈し、埋土は黒褐色粘質土の単純一層である。出土遺物は少量で、図示できるものはなかった。

第V章 総括

1. 遺物について

本遺跡で出土した遺物は、その大半が竪穴住居（S T 1）からのものである。出土状況は、埋土の中位から、多量の弥生土器片と礫が混じり合った状態で検出された。弥生土器は、ほぼ完形品から細片のものまで夥しい量の出土であった。礫については拳大から人頭大のものがみられ、これらはおそらく埋没過程において土器片と伴に人為的に投棄された遺物と考えられる。

S T 1の弥生土器の割合は、壺24点（6.4%）、甕312点（83.9%）、鉢30点（8.1%）、甗6点（1.6%）で、圧倒的に甕が多くを占める。以下各器種ごとにその特徴をみることにする。まず壺は口縁部の形態により3つのタイプに大別することができる。すなわち漏斗状に外反するもの（Ⅰ類：1～3）、ラップ状に大きく開くもの（Ⅱ類：4～7）、二重口縁を呈するもの（Ⅲ類：8～16）である。なかでも二重口縁は、さらに口縁部の形態等により次の4種に細分可能である。①頸部は外反気味に上がり、口縁部は若干丸味を帯びて内傾するもの（8）、②頸部は外反気味に上がり、口縁部は内傾するもの（9～11）、③頸部は外反し、口縁部は内湾気味に屈曲して上方へほぼ直立するもの（12～14）、④頸部は大きく外反し、口縁部は短く内傾するもの（15～16）、①～④の口縁部は、いずれも内傾、またはそれに類似したパターンを示している。県内における二重口縁の壺は、庄内式土器が出現する段階に相当する弥生時代後期6⁽¹⁾に登場する。また後期6は、南四国の土器編年⁽²⁾で言えば、ヒビノキⅡ式土器（弥生時代後期終末）に対応させることができる。その類例として、ひびのきサウジ遺跡⁽³⁾S T 8出土の第25図103・104、林田遺跡⁽⁴⁾S T 1出土の第15図1、五軒屋敷遺跡⁽⁵⁾S T 1出土の第17図1～5などをあげることができる。当該期の特徴として無文の土器が多いなか、限られた壺にのみ装飾が施されることが指摘できる。その場合、Ⅰ・Ⅱ類とした器型に多くみられるが、今次でも確認された。14の上口縁の外面にみられるヘラ描鋸歯文は、加飾を意図したと考えられ、その多くの類例を香川県稲木遺跡⁽⁶⁾に求めることができる。また同遺跡では、二重口縁が内傾を呈すタイプが数多く認められており、時期・生産集団及び方法等相互の関連性を考える上で大変興味深い。次に甕であるが、口縁部の形態は「く」の字状に外反するものが71点と多く、甕全体の83.5%を占める。また底部においては、それぞれ平底を有するもの198点（77.3%）、突出気味のもの29点（11.3%）、丸底を有するもの26点（10.2%）、尖底気味のもの3点（1.2%）となっており、形態から上記ヒビノキⅡ式の時期に位置づけてよからう。さらに外面手法については完形品でみた場合、叩き調整後、口縁部及び胴部下半から底部にかけて丁寧なハケ調整を施している。また口縁部叩き出し技法が目につき、叩き調整は底部外面にまで入念に施すものも多かった。内面手法は、ハケ調整後ナデを行うものが多く、口縁部はハケ、底部付近はナデで仕上げているケースが顕著であった。外面手法の様相等からみても、叩き調整が本格的に定着するヒビノキⅡ式⁽⁷⁾の時期と考えてよからう。当遺跡では、甕以外に完形の鉢が多く出土した。形

態は平底から内湾して立ち上がるタイプが多くみられ、平底を押しつぶすもの、丸底のものも数点あった。。平底→丸底、すなわちヒビノキⅡ式→Ⅲ式への移行期と判断してよからう。また手法は、内面においてハケ調整を主に、ハケ調整後ナデ、ナデ、ハケ調整後ヘラ磨き、ナデ調整後ヘラ磨き、ヘラ磨き、ヘラ削りを行った後ナデとバラエティーに富んでいる。

土器出土状況として注目できるのは、SK2からの弥生土器壺・甕等である。128の壺は、ST1出土の壺(18)と共に、幼児対象の壺棺の可能性が極めて強い。同壺はSK2床面直上より出土し、さらにその上へ甕・鉢等を丁寧に1点1点重ねた状態で検出された。この点から、ST1の集中廃棄された土器とは違い、SK2出土の128以外の129～139は、供献された祭祀用の土器と考えられる。徳島県黒谷川郡頭遺跡V₍₈₎では、土坑墓及び溝に供献用の土器が多数みられ、祭祀形態のバリエーションを考える上で大変興味深い。

平安時代の遺物は、須恵器・土師器・瓦質土器等があげられるが、なかでもSK4出土の骨壺(146)は貴重な資料となった。同壺は須恵質で、ロクロ目が顕著に残り、粘土紐仕上げによる手法をとる。同時期の骨壺出土例は僅少で、南国市稲生遊行及び久礼田⁽⁹⁾出土のもの(平安時代前期)、夜須町西山⁽¹⁰⁾出土のもの(平安時代後半)、中村市具同中山遺跡群⁽¹¹⁾出土のもの(平安時代後半)に類型を求めることができる。当遺跡出土の骨壺は、形態等から平安時代後半に該当するものと考えられる。

2. 遺構について

当遺跡で検出した遺構は、竪穴住居2棟、掘立柱建物2棟、土坑4基、溝2条、ピット及び柱穴群である。まず弥生時代の遺構として、竪穴住居2棟について述べてみたい。どちらもベッド状遺構を伴い、時期は出土遺物等から弥生時代後期末に位置付けできる。比較的残りの良いST1のベッド状遺構の造出は、床面削り出し方法による地山成形である。南四国におけるベッド状遺構は、すでに周知のごとく弥生後期後半頃から出現しはじめ、後期末になるとかなり多くみられるようになり、前記の県下の遺跡においても多くの類例を認める。ST1は、多量の弥生土器が礫と混在した状態で検出されており、住居の機能を失った後、土器の廃棄場として使用された観を払拭することはできない。近年県下では、同機能を有する住居址がよくみられ、今後資料の蓄積をまってさらに検討を加えたい。またSK2については、住居址とほぼ同時期に営まれた土坑墓で、壺棺に対する供献土器の埋納とみなしてよい。僅か径70cmの円形の土坑から、前述したような状態で土器が検出されたのは県下でも珍しく、これについても今後類例の増加をまちたい。

次に平安時代の遺構は、基盤整備の影響をかなり受けており、古代面の攪乱が顕著であった。したがって遺物が乏しく時期細分及び性格を明確にすることができないが、可能な限り検討を試みた。SB1は、桁行3間(7.00m)×梁間(5.60m)のほぼ南北棟で、柱穴は、大きさが長径75cm、深さ41.3cmのものが検出され、しっかりとした建物が存在したことが推測できる。柱穴より出土の須恵器等より奈良時代後半のものと考えられる。またSD1は、西南部で住居址(ST2)を切って先後関係は明確であり、出土遺物等より奈良時代のものと考えられる。こ

れに対しSD2は、SD1との切り合いが断面から判断できず、また出土遺物も僅少な点から正確な時期は不明と言わざるを得ない。なお、SD2の時期は、少量の混入遺物を頼りに奈良時代に当てておいた。

(註)

- (1) 出原恵三「土佐の弥生後期土器編年」『古代学協会第4回大会資料』1990年
- (2) 岡本健児「南四国における叩目のある弥生土器と土師器」『森貞次郎博士古稀記念・古文化論集』下 1982年
- (3) 高橋啓明『ひびのきサウジ遺跡発掘調査報告書』土佐山田町教育委員会 1990年
- (4) 森田尚宏他『林田遺跡』土佐山田教育委員会 1985年
- (5) 角谷和男他『五軒屋敷遺跡調査報告書』高知県教育委員会 1984年
- (6) 香川県埋蔵文化財研究会『四国横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告 第6冊』
- (7) (2)に同じ
- (8) 徳島県教育委員会『黒谷川郡頭遺跡V』1990年
- (9) 岡本健児『第4章古代の時代』『南国市史』上巻 南国市教育委員会 1979年
- (10) (9)に同じ
- (11) 高知県教育委員会・(財)高知県文化財団埋蔵文化財センター『中筋川埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅲ』— 具同中山遺跡群 — 1992年

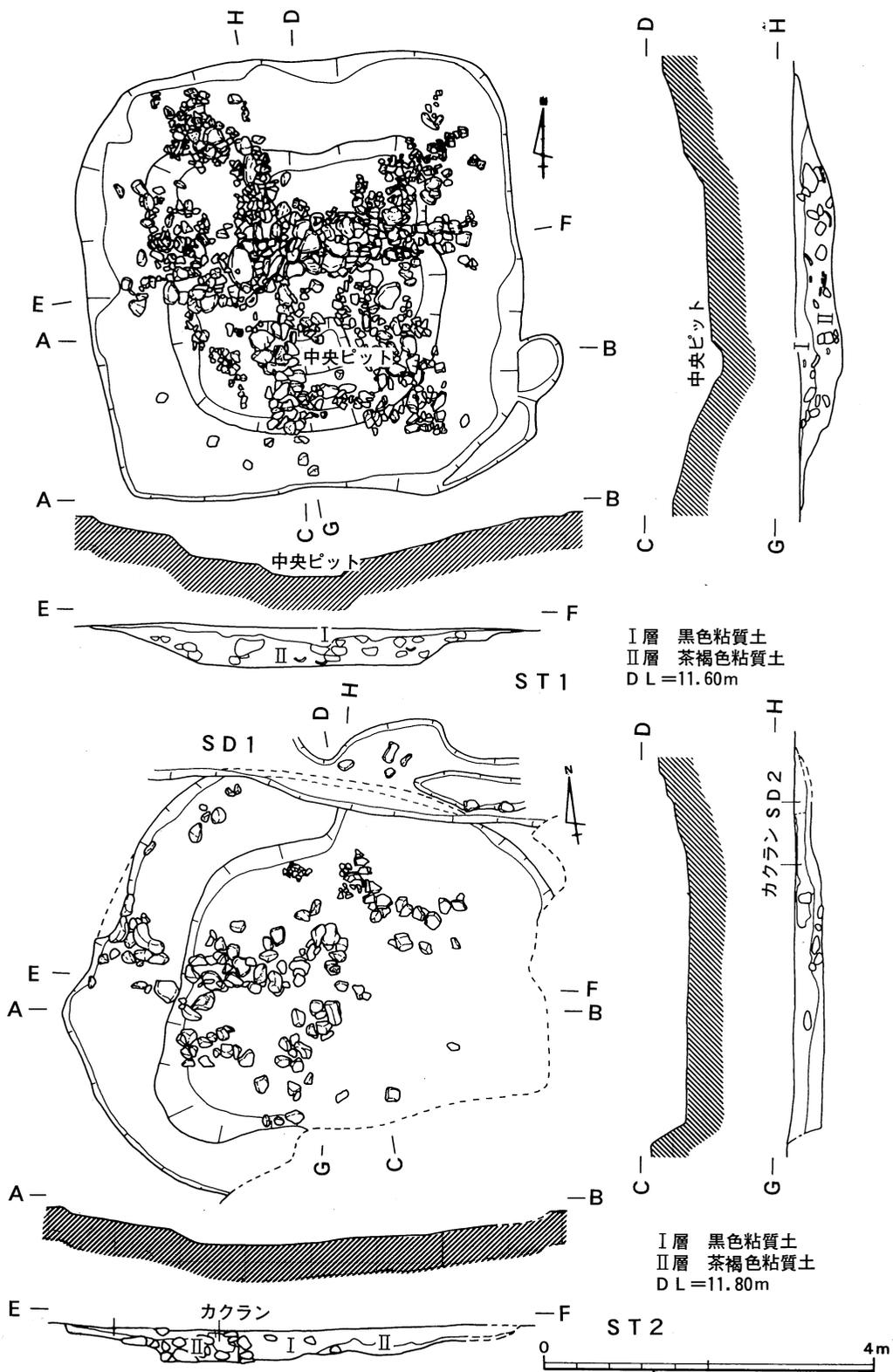
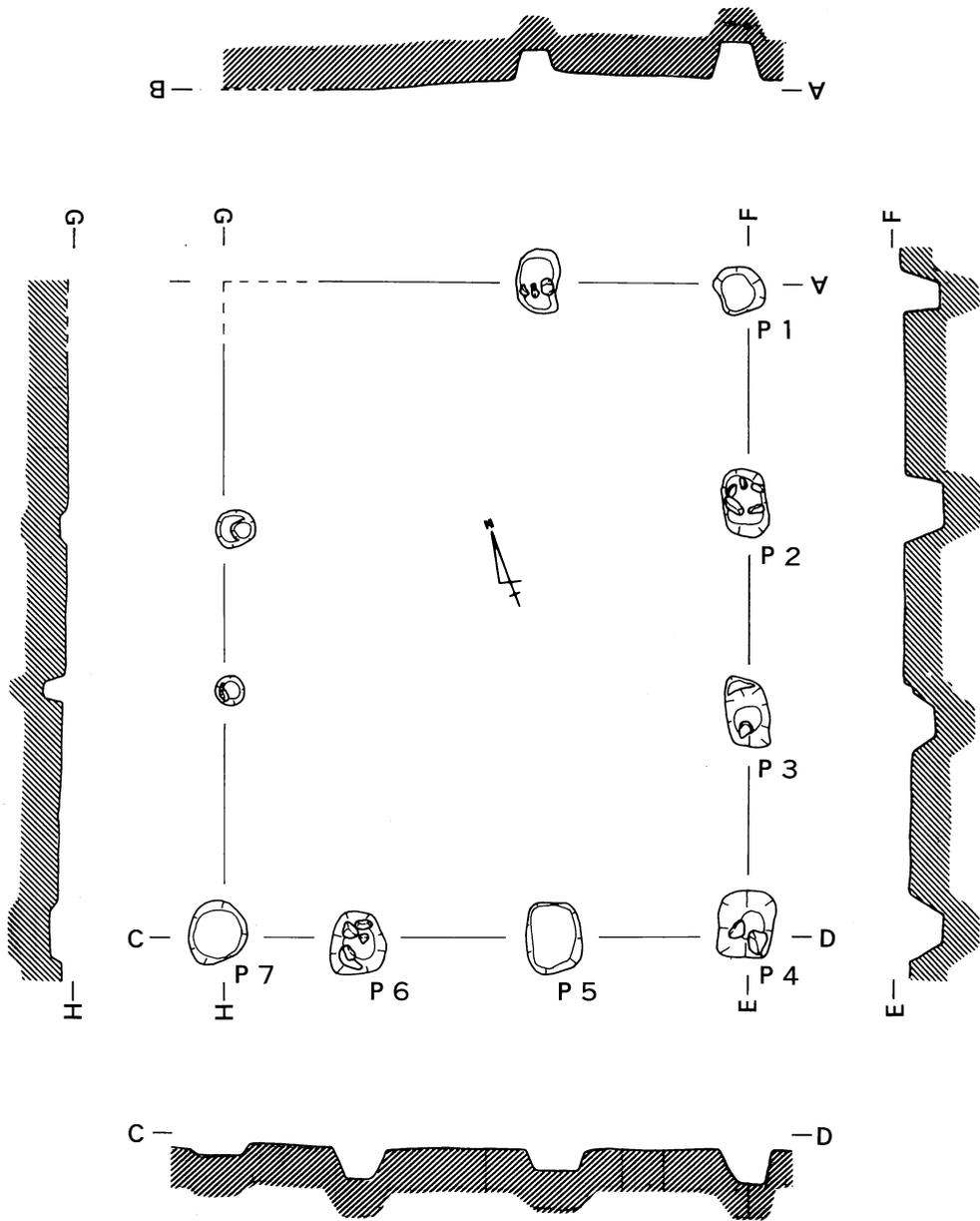


Fig. 7 ST1・ST2 実測図



D.L=11.80m

0 4m

Fig. 8 SB1 実測図

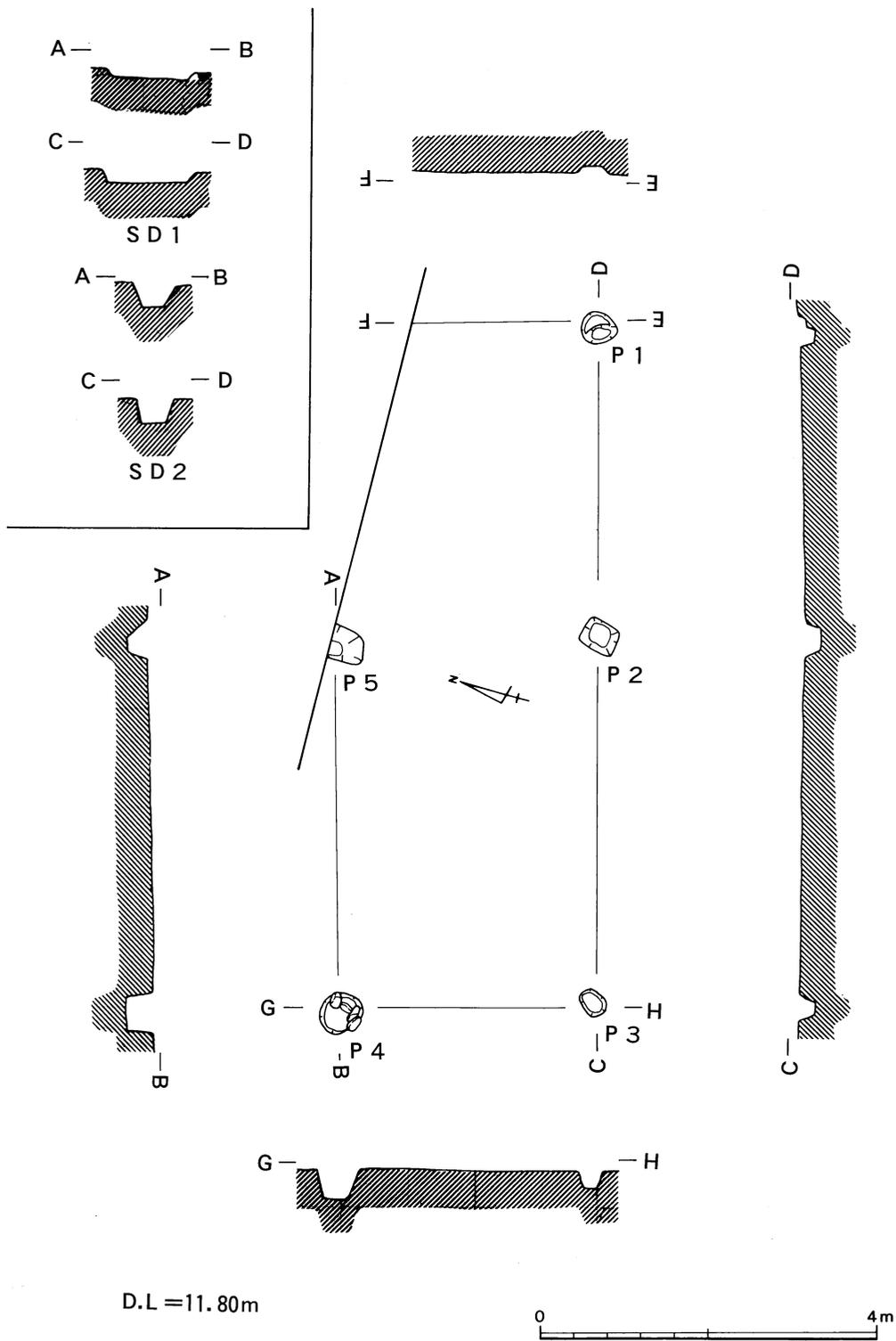


Fig. 9 SB2 · SD1 · SD2 実測図

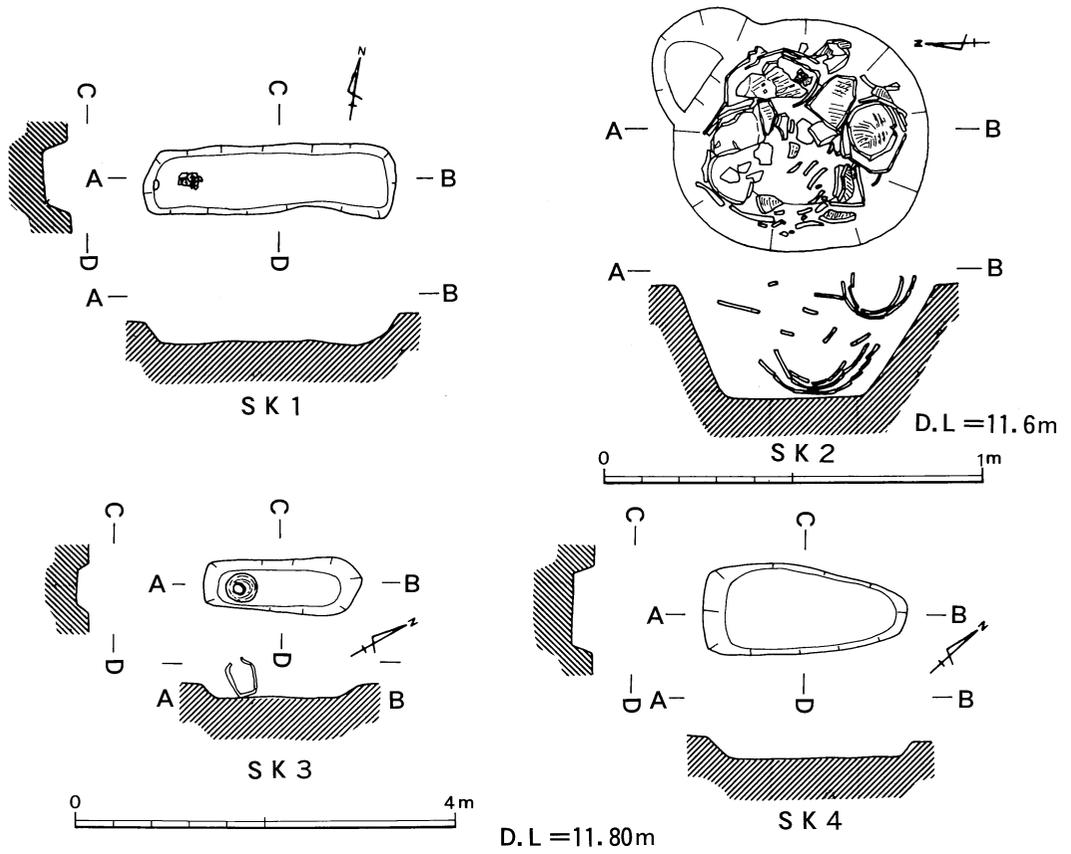


Fig. 10 SK 1 ~ 4 実測図

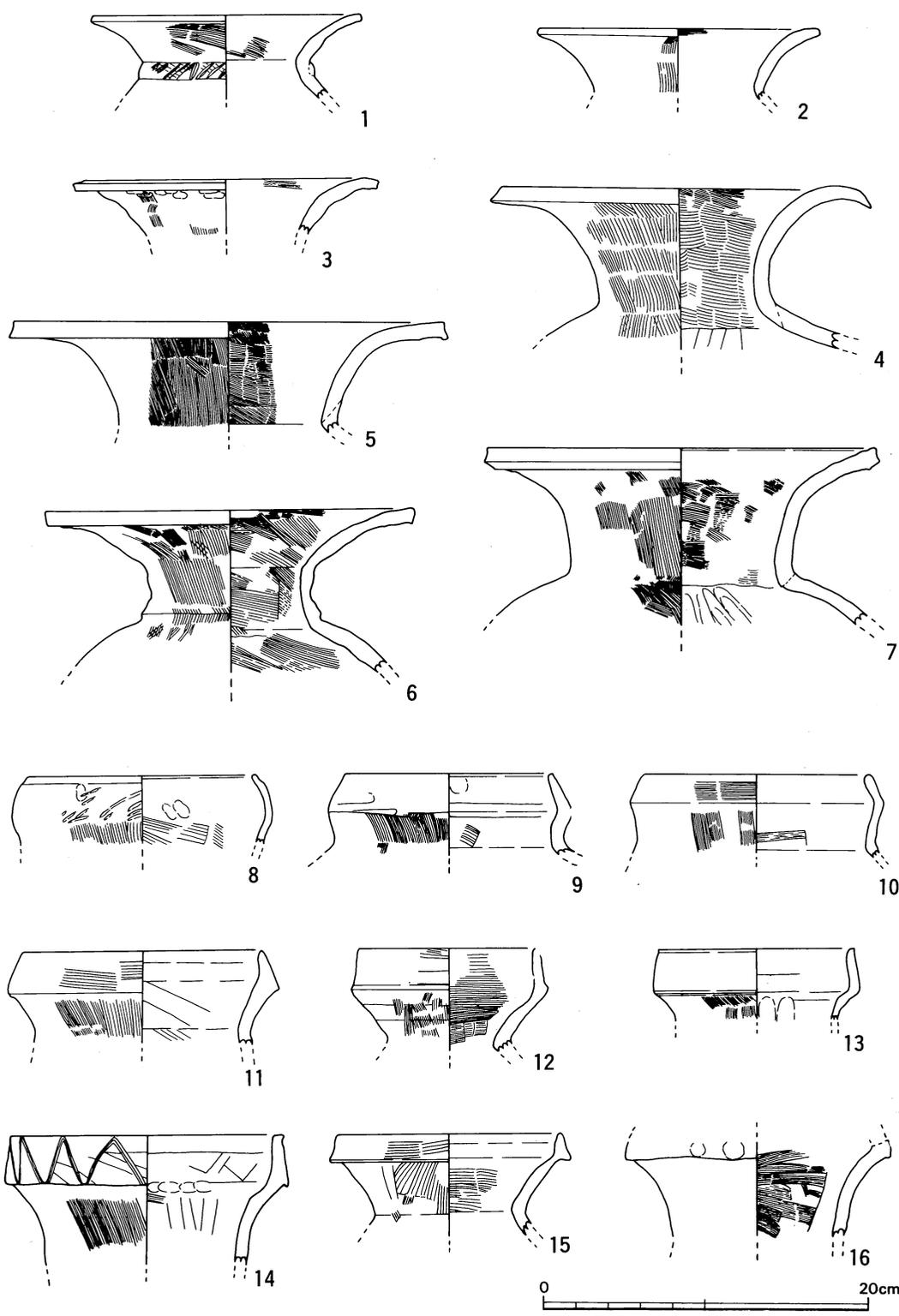


Fig. 11 ST 1 出土遺物

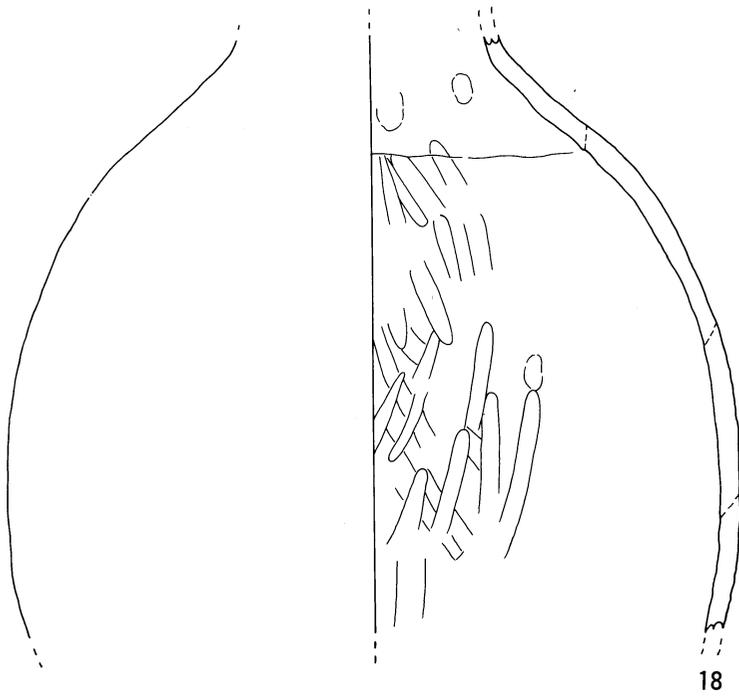
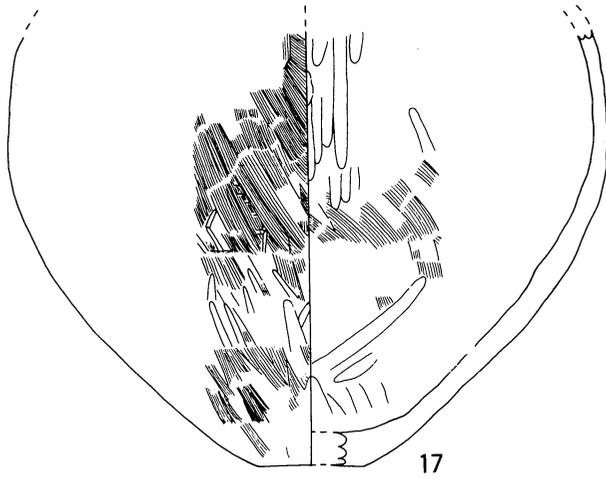


Fig. 12 ST 1 出土遺物

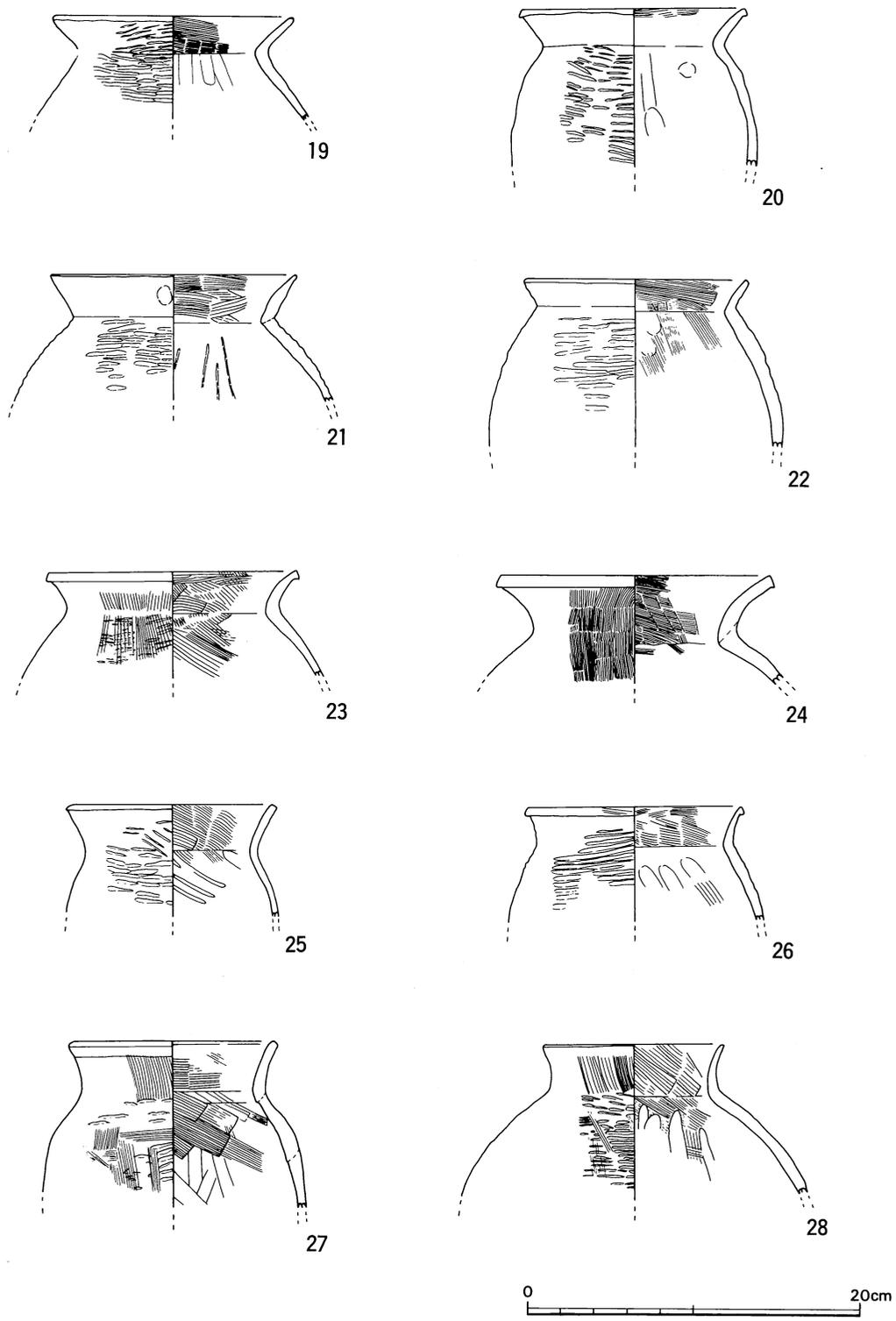


Fig. 13 S T 1 出土遺物

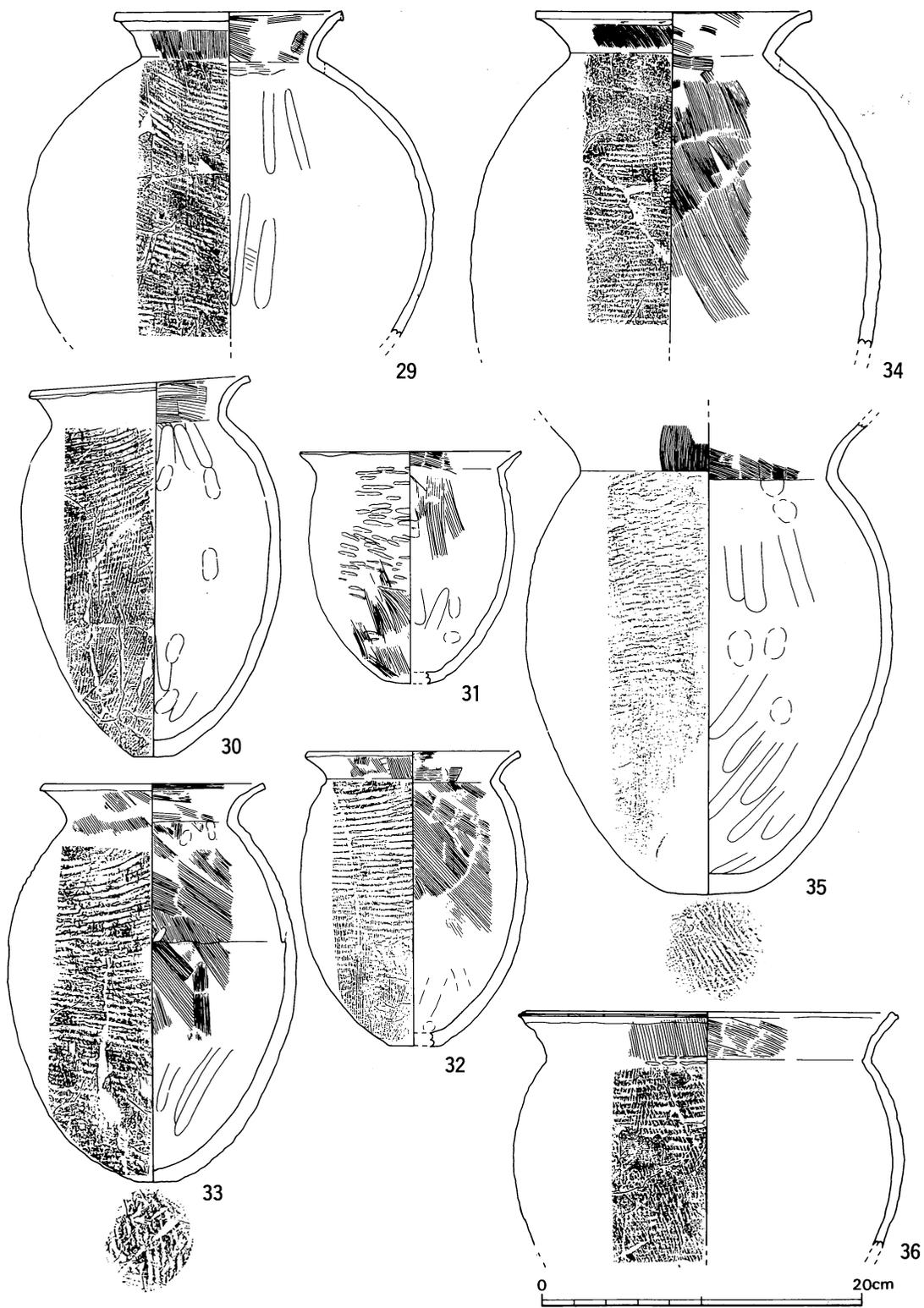


Fig. 14 ST 1 出土遺物

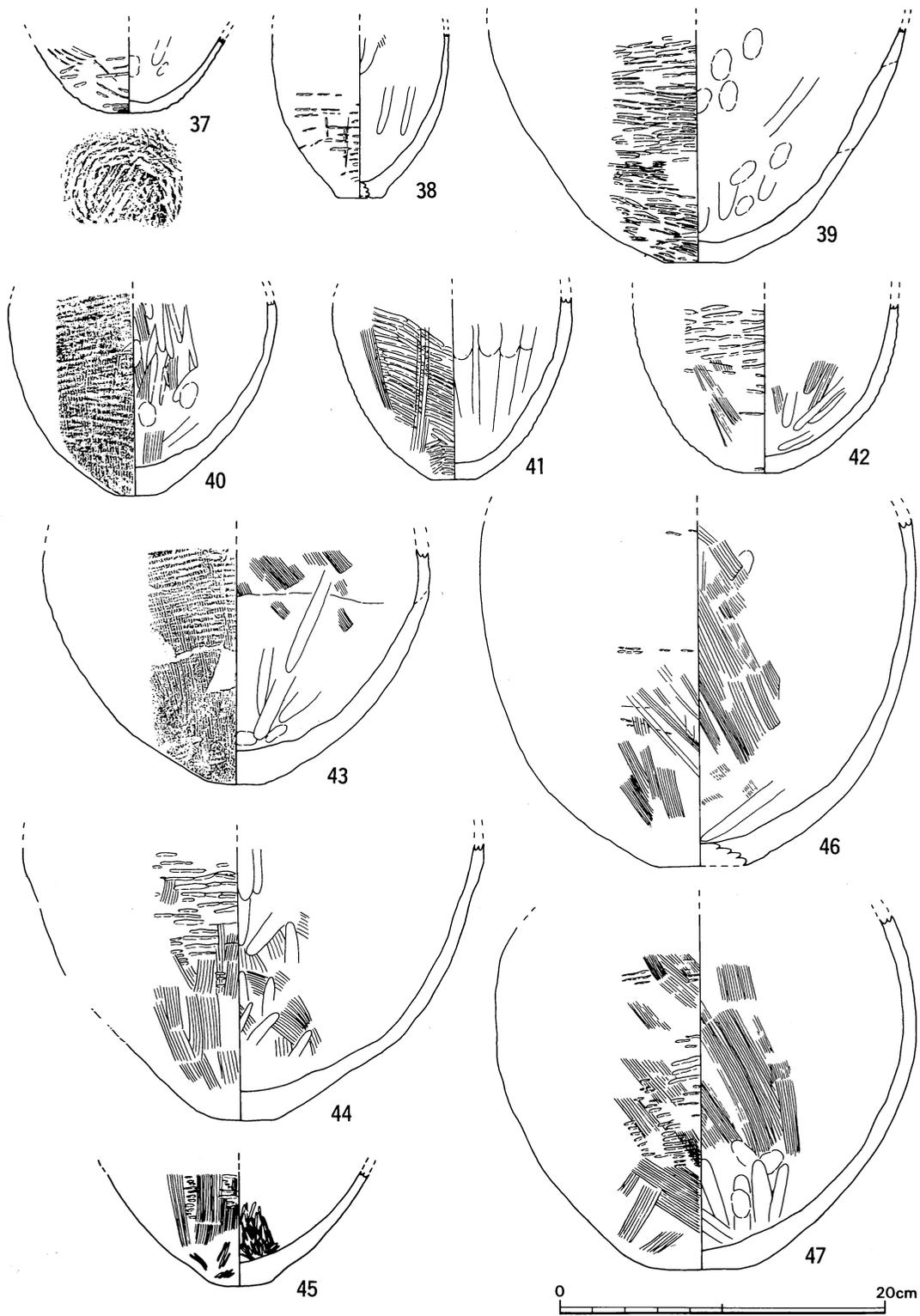


Fig. 15 S T 1 出土遺物

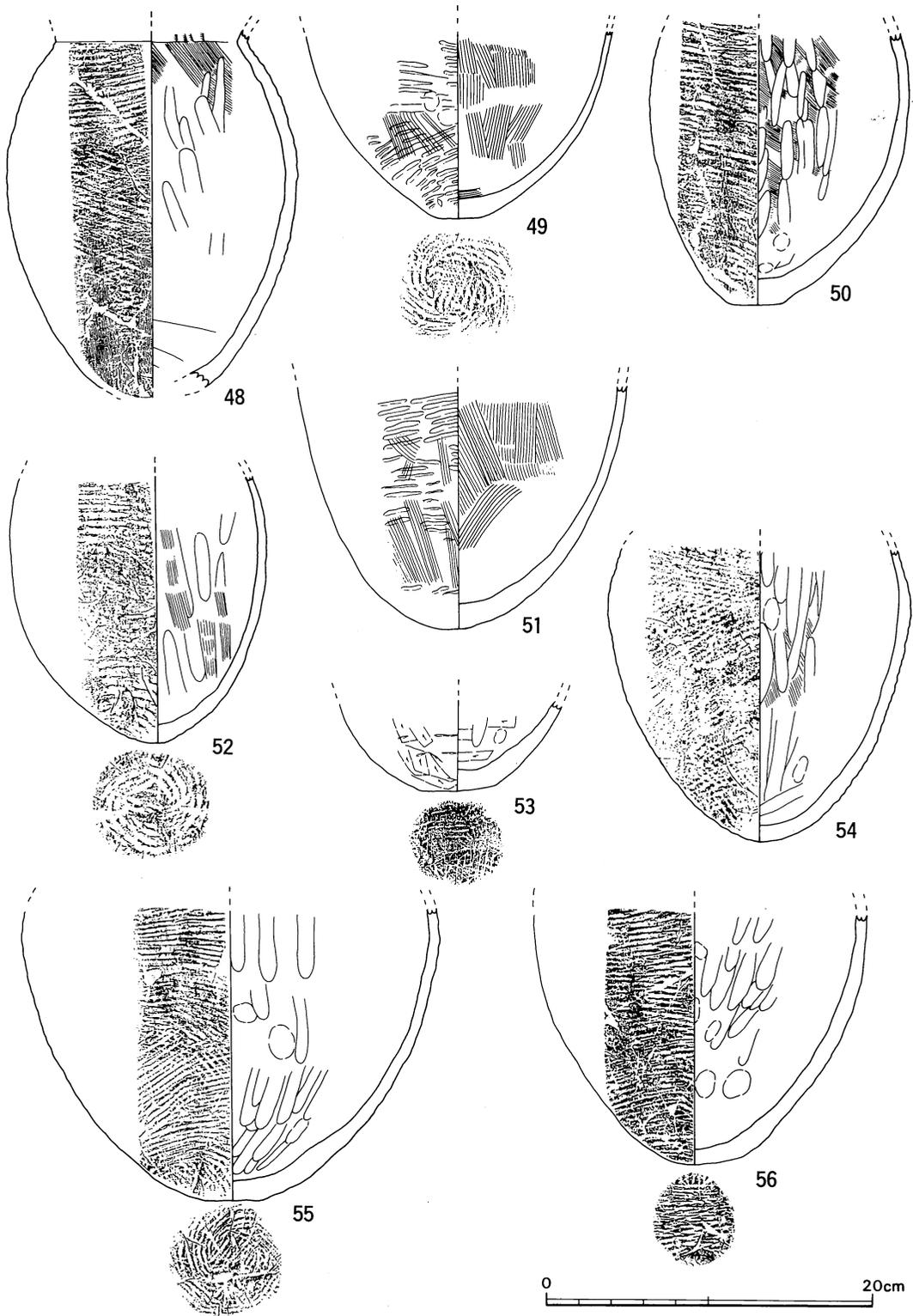


Fig. 16 S T 1 出土遺物

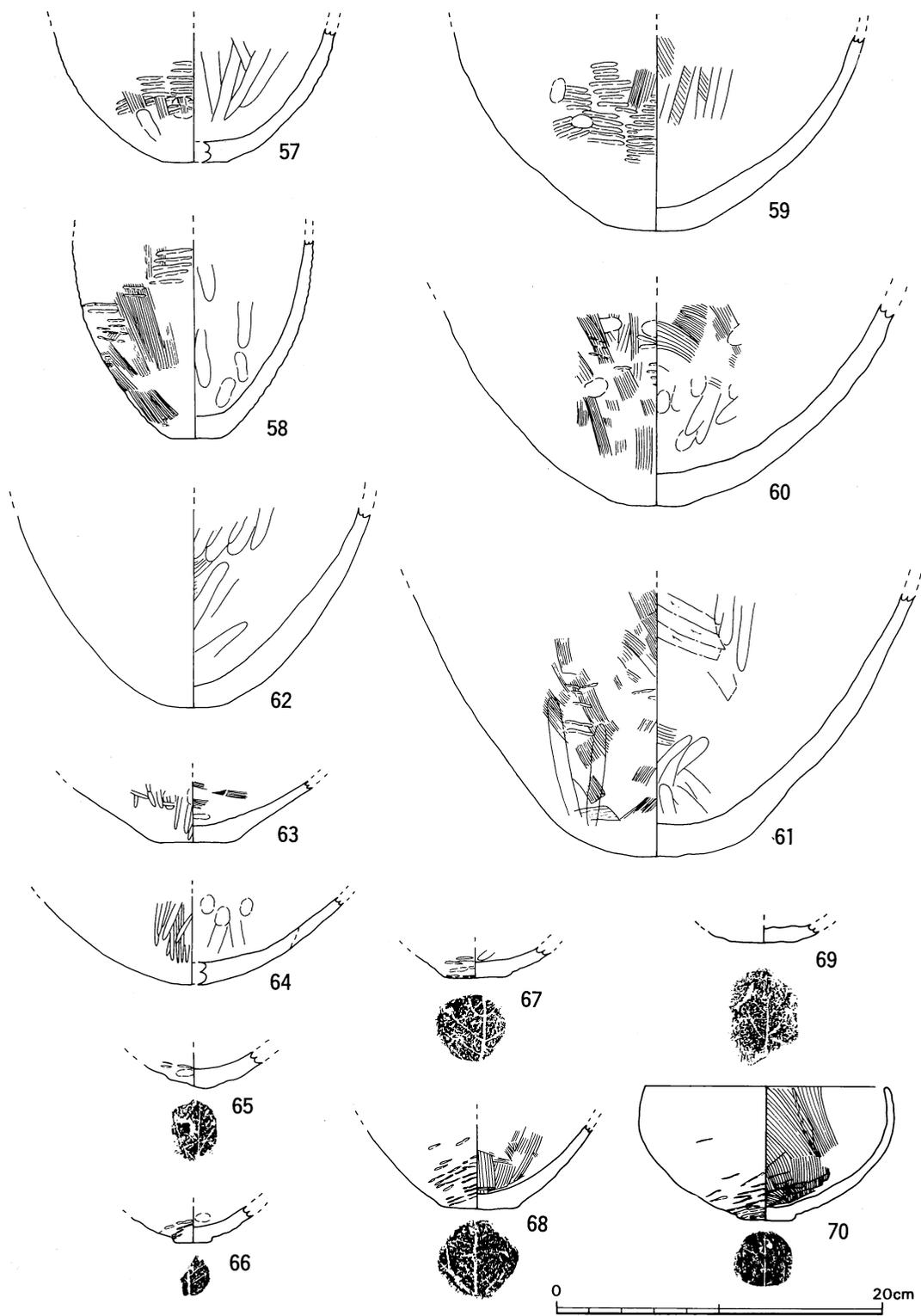


Fig. 17 S T 1 出土遺物

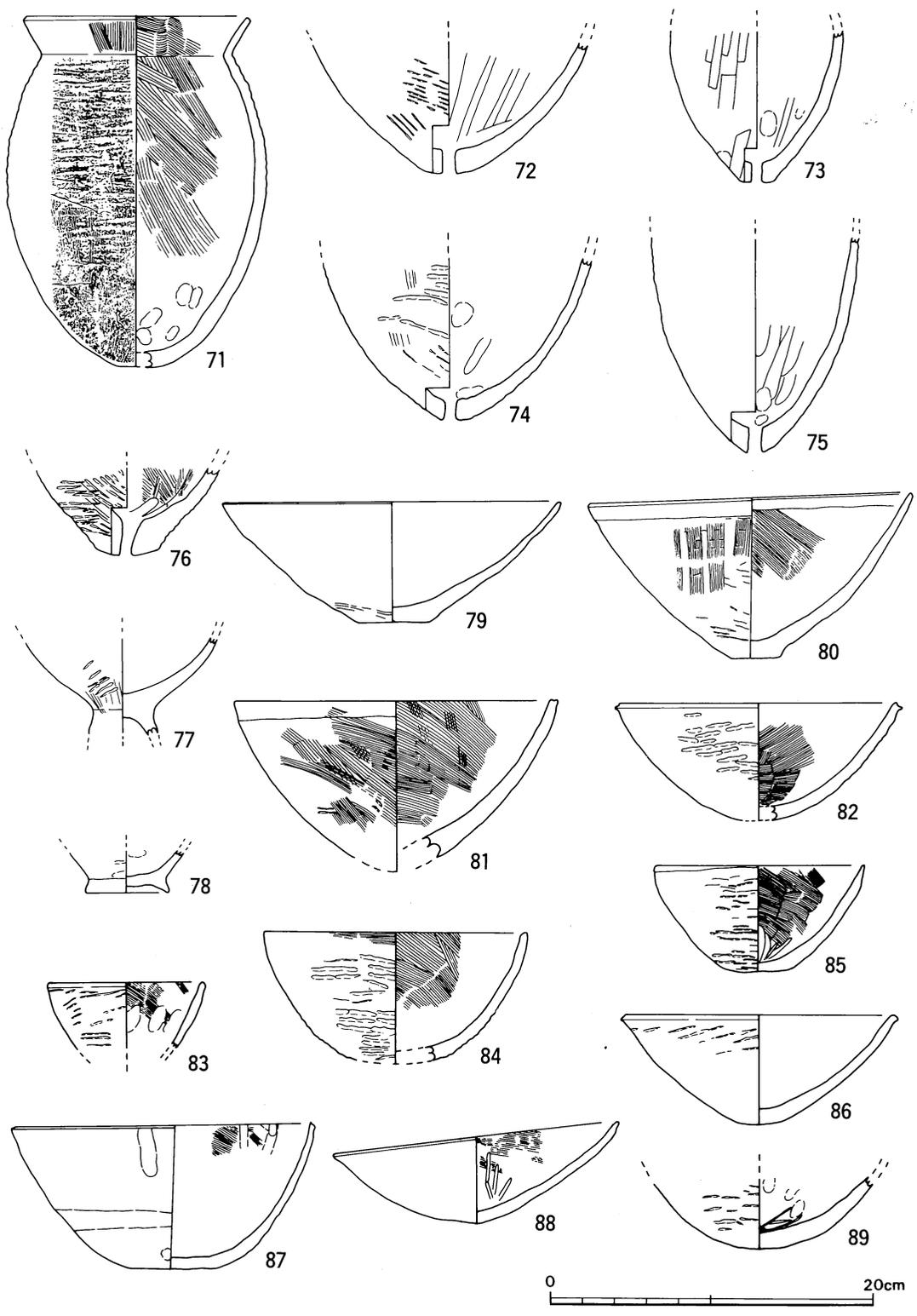


Fig. 18 ST 1 出土遺物

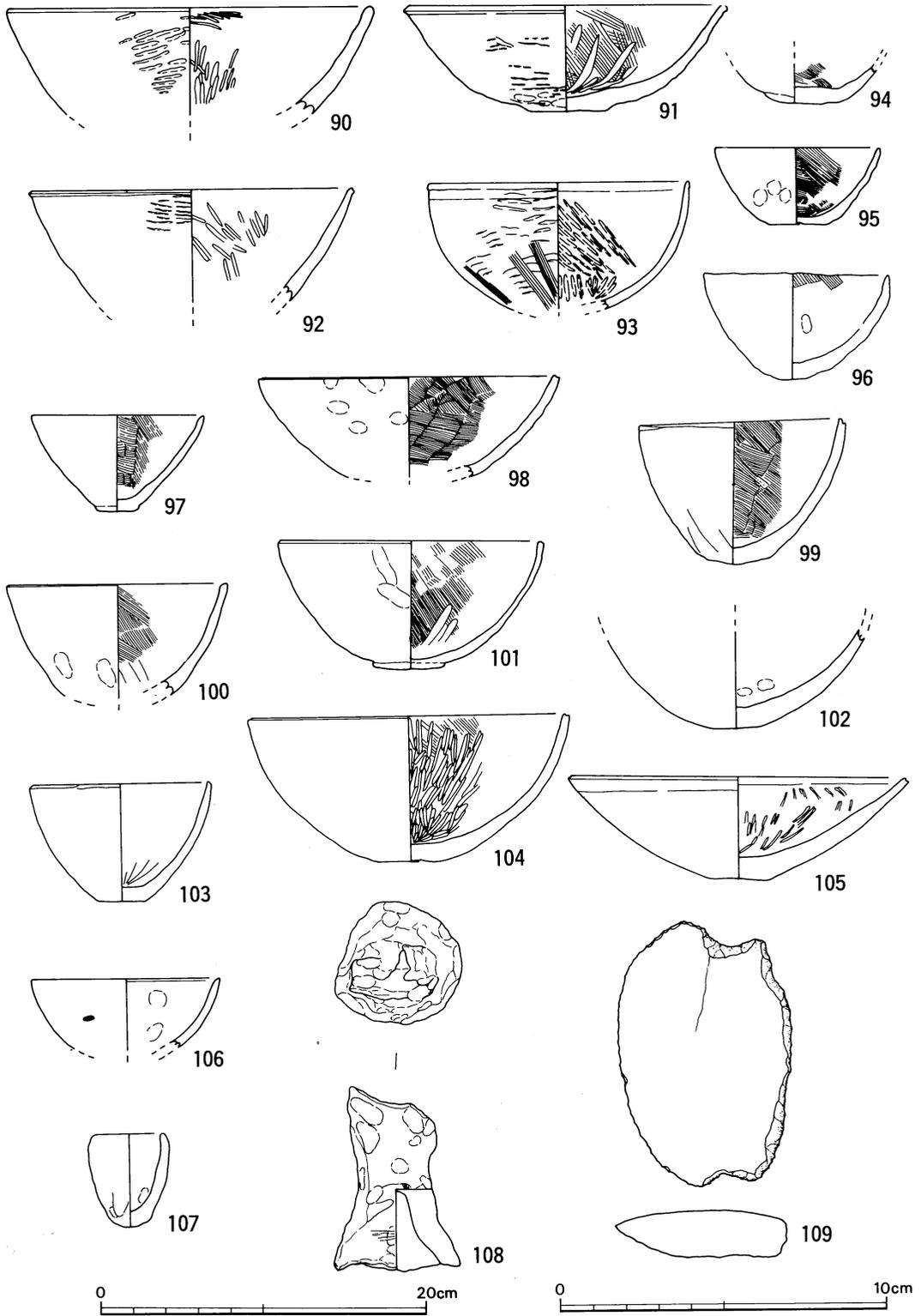


Fig. 19 ST 1 出土遺物

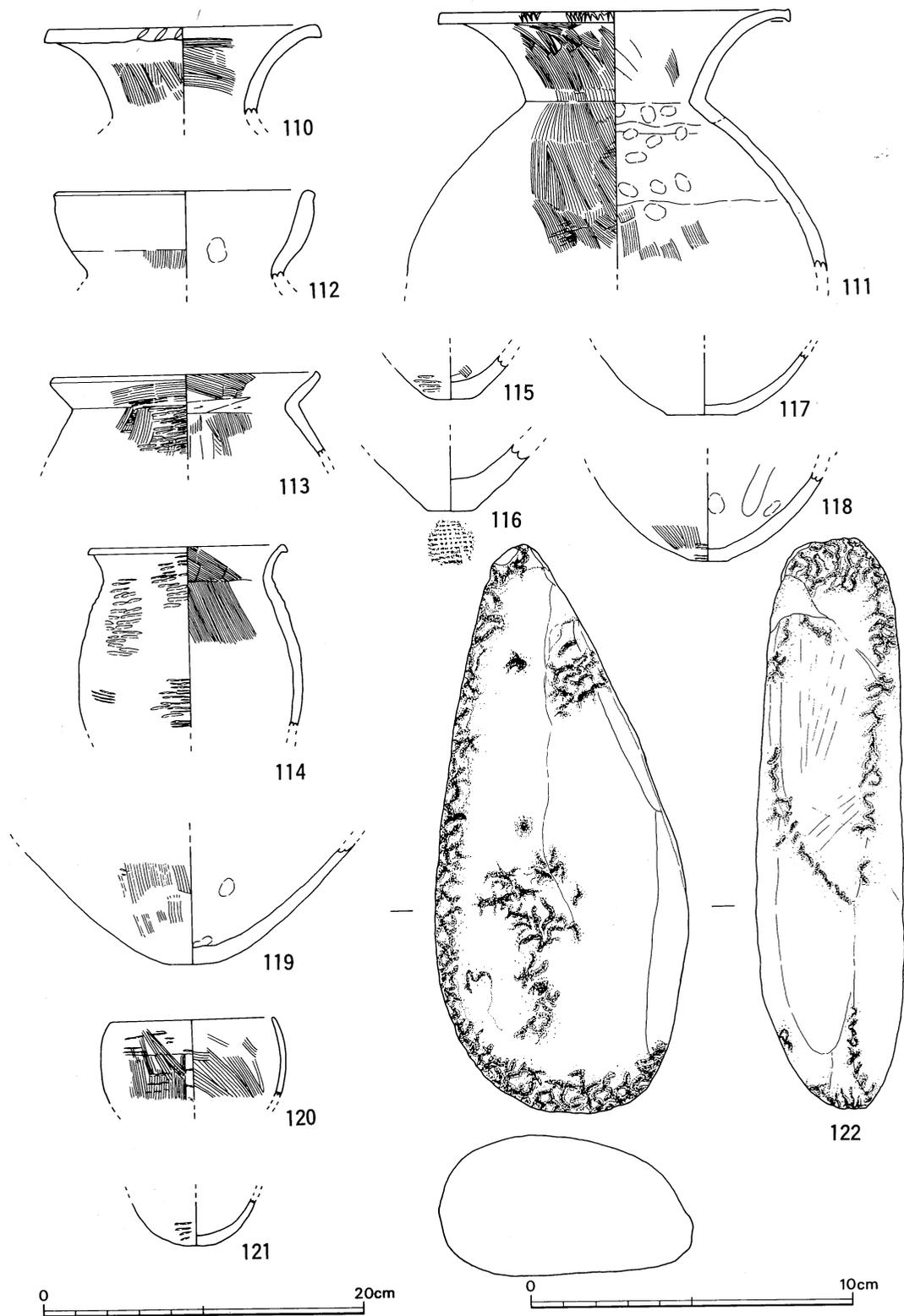


Fig. 20 ST 2 出土遺物

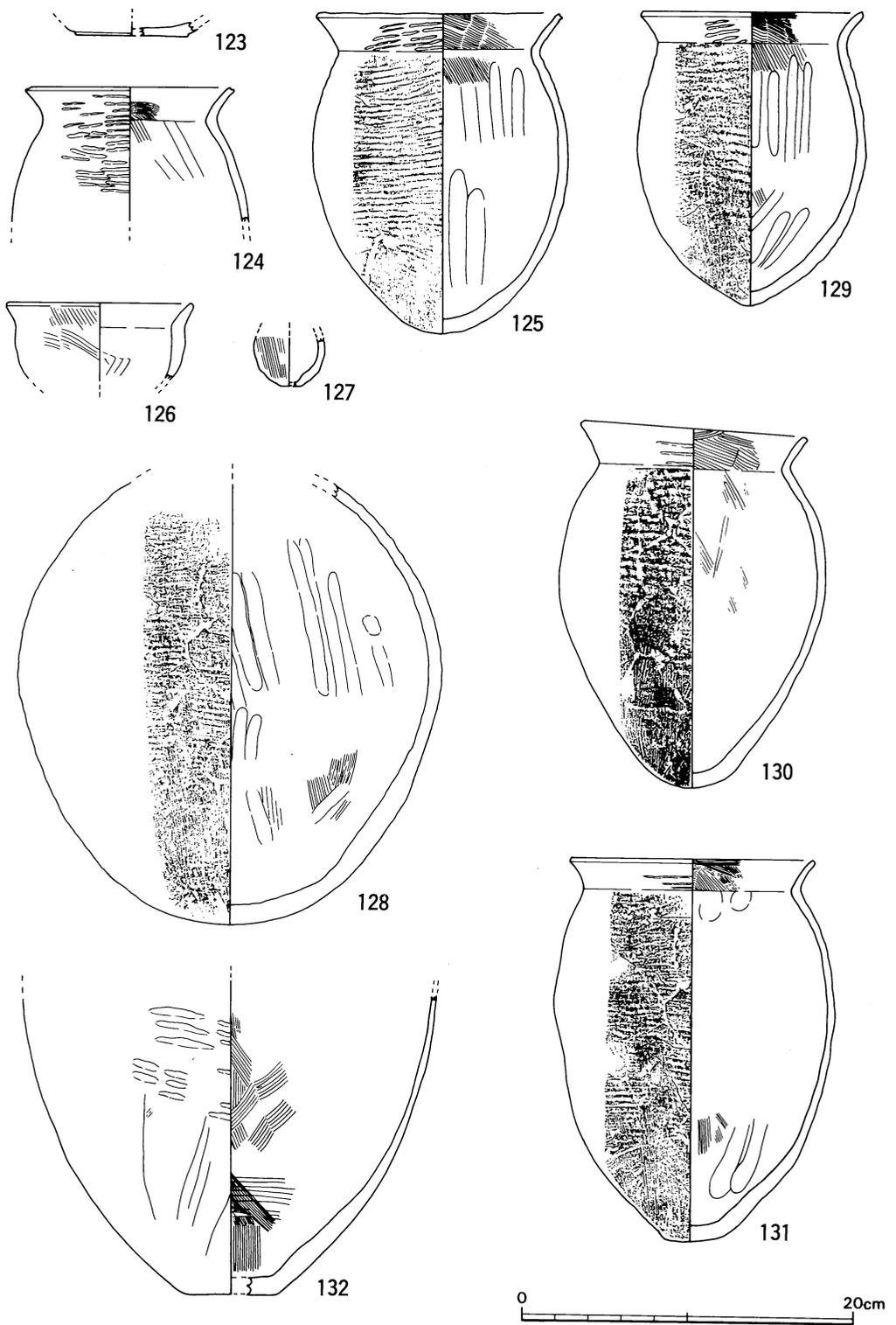


Fig. 21 SB 1 · SK 1 · SK 2 出土遺物
 (SB 1 : 123, SK 1 : 124~127, SK 2 : 128~132)

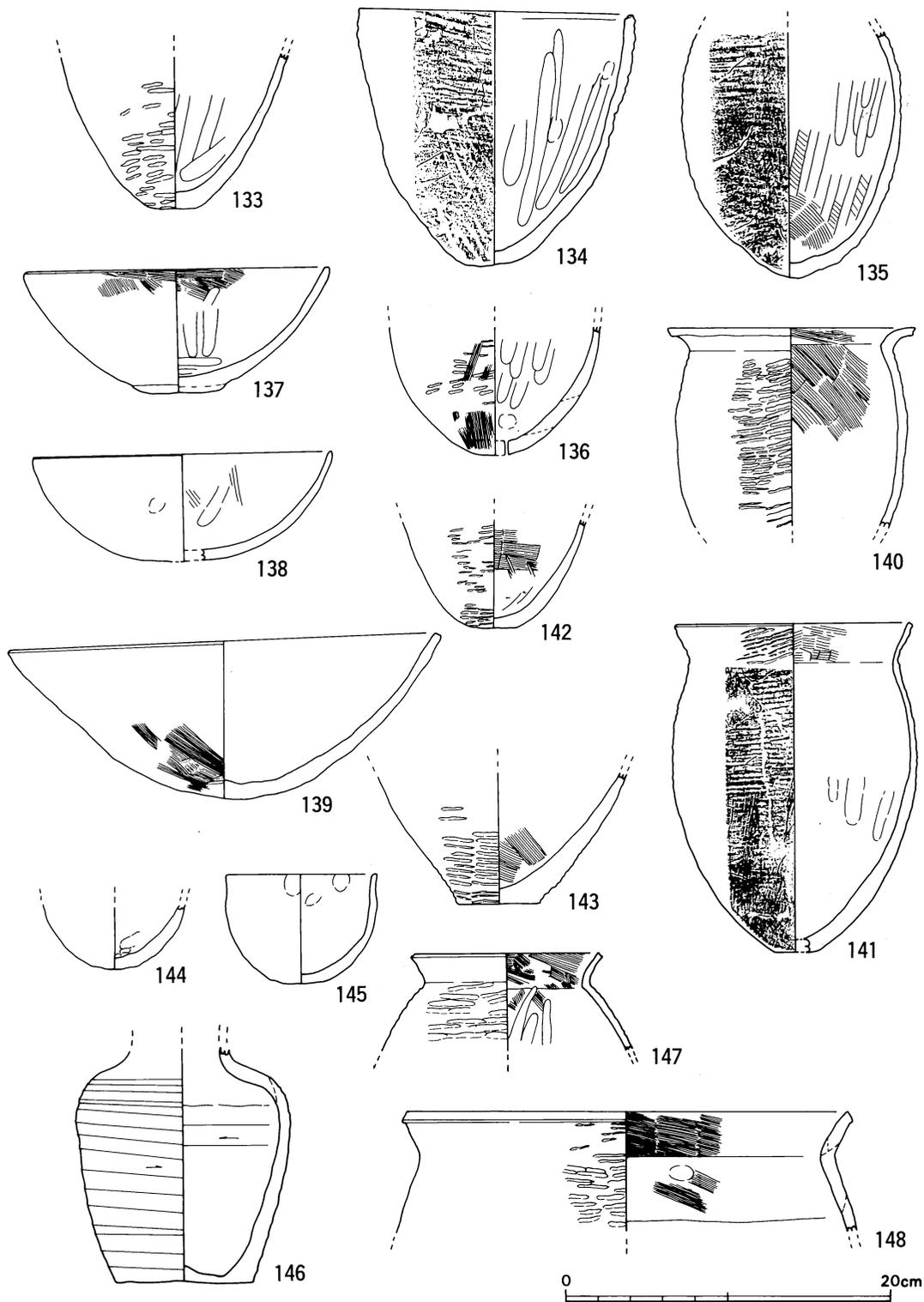


Fig. 22 SK 2 · SK 3 · SK 4 · P14 出土遺物
 (SK 2 : 133~139, SK 3 : 140~145, SK 4 : 146, P14 : 147 · 148)

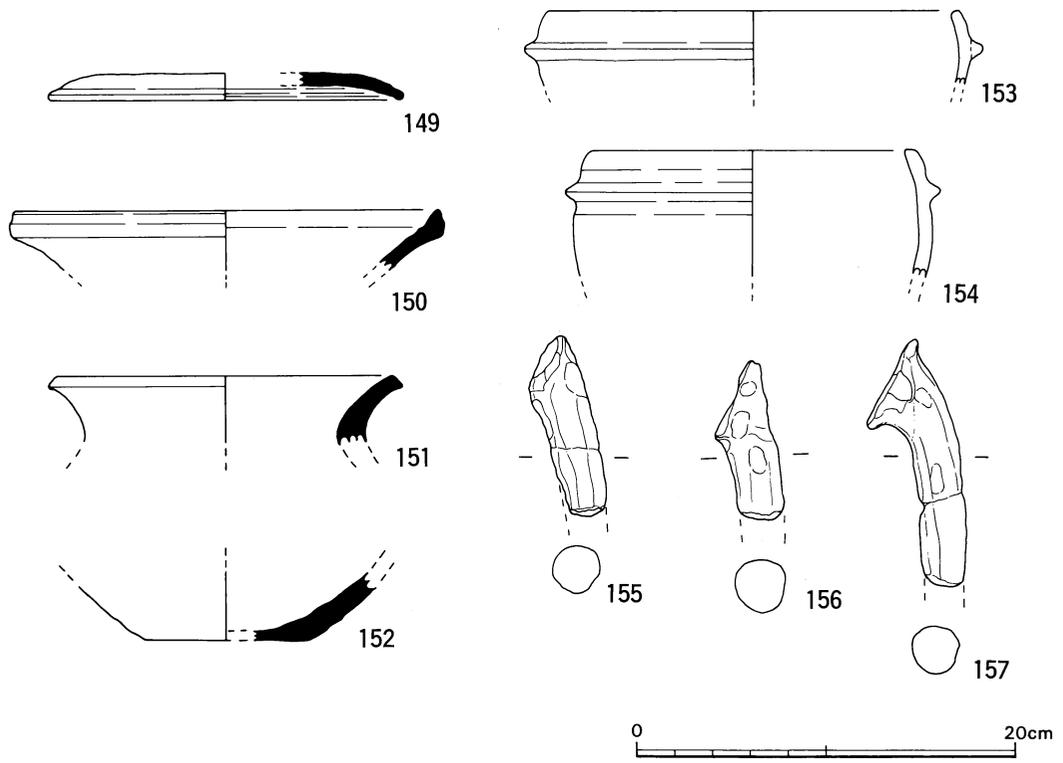


Fig. 23 SD 1 出土遺物

Tab. 2 遺物観察表

挿図番号	遺構番号	器種	法量 (cm)	口径 器高 胴径 底径	形態・文様	手法	備考
1	ST1	弥生土器 壺	16.4 (5.3)	— — —	口縁部は漏斗状に外反し、口唇部は外傾して面をなす。	口縁部内外面共に右下がりのハケ調整後、ナデを行う。頸部外面には扁平の粘土帯を貼付し、さらにその上に左下がりの列点文を配す。	
2	〃	〃 壺	17.6 (4.4)	— — —	〃	内外面共に摩擦が著しいが、ハケ調整後、ナデを行う。	
3	〃	〃 壺	15.8 (5.1)	— — —	口縁部は外方へ強くつまみ出され、漏斗状に外反する。口唇部は僅かに凹状の面をなす。	外面は右下がりのハケ調整後、ヨコナデを施し、指頭圧痕を顕著に残す。内面はヨコハケ調整後、ナデを行う。	
4	〃	〃 壺	23.6 (10.0)	— — —	口縁部はラップ状に大きく外反し、口縁端部は下方にのびる。口唇部は外傾して面をなす。	外面は荒いハケ原体によるハケ調整を縦方向に、内面は同ハケ調整を右下がりに施す。頸部から上胴部内面は縦方向のナデ調整を施す。	
5	〃	〃 壺	27.0 (6.5)	— — —	口縁部はラップ状に大きく外反し、口縁端部は下方に肥厚する。口唇部は僅かに凹状の面をなす。	内外面共に丁寧なハケ調整を施し、口縁端部外面にはハケ調整後、ヨコナデが顕著にみられる。	
6	〃	〃 壺	23.0 (10.2)	— — —	口縁部はラップ状に大きく外反し、口唇部は幅広い面をなす。	内外面共に荒いハケ原体によるハケ調整を施し、口縁端部及び頸部内外面を入念にナデている。	
7	〃	〃 壺	24.4 (11.0)	— — —	口縁部はラップ状に大きく外反し、口縁端部は上下に肥厚し、口唇部は僅かに凹状の面をなす。	内外面共に細かいハケ原体によるハケ調整を丁寧に施し、口縁端部及び頸部内外面を入念にナデている。また胴部内面は、右下がりにナデ調整を施す。	
8	〃	〃 壺	14.0 (4.2)	— — —	二重口縁である。口縁部は若干丸味を帯びて内傾する。口縁端部は僅かに凹み、口唇部は丸くおさまる。	外面は左下がりの叩き調整後、ヨコナデを入念に施す。下位は右下がりのハケ調整を施す。内面は右下がりのハケ調整後、ナデを行う。	
9	〃	〃 壺	13.0 (5.0)	— — —	二重口縁である。口縁部は外反気味に上がった後稜をもって内傾する。口唇部は僅かに外傾して面をなす。	上口縁は内外面共ヨコナデ、下口縁は内外面共に右下がりのハケ調整を施す。なお、上口縁の内面には指頭圧痕をとどめる。	
10	〃	〃 壺	14.2 (5.1)	— — —	二重口縁である。口縁部は外反気味に上がった後稜をもって内傾する。口唇部は丸くおさまる。	上口縁の外面はモコハケ、下口縁の外面は右下がりのハケ調整を施す。下口縁の内面には、微かにヨコハケ調整が残る。	
11	〃	〃 壺	14.4 (5.9)	— — —	二重口縁である。口縁部は外反気味に上がった後稜をもって強く内傾する。	上口縁の外面はヨコハケ、内面はヨコナデ調整を施す。下口縁の外面は右下がりのハケ、内面は右下がりのナデ調整を施す。頸部内面に微かに右下がりのハケ調整が残る。	
12	〃	〃 壺	11.4 (6.4)	— — —	二重口縁である。口縁部は外反した後、稜をもって内湾気味に屈曲して上方へほぼ直立する。口唇部は僅かに外傾して面をなす。	外面はハケ調整後、ヨコナデを施す。内面はヨコハケ調整をナデ消す。	
13	〃	〃 壺	12.2 (4.4)	— — —	〃	上口縁の外面はナデ、下口縁の外面はハケ調整を施す。内面はナデ調整を施し、部分的に指頭圧痕を残す。	
14	〃	〃 壺	17.0 (8.2)	— — —	二重口縁である。口縁部は外反した後、稜をもって内湾気味に屈曲して上方へほぼ直立する。口唇部は外傾して面をなし、上下に若干拡張している。上口縁の外面には、ヘラによる線描き鋸歯文がみられる。	上口縁の外面は右下がりのナデ調整、下口縁から頸部外面にかけては右下がりのハケ調整を施す。下口縁から頸部内面にかけては縦方向にナデている。また、内面の稜線を部分的に指頭で消している。	
15	〃	〃 壺	15.8 (6.4)	— — —	二重口縁である。口縁部は稜をもって漏斗状に外反する。口唇部は外傾して面をなし、上下に若干拡張している。	外面はハケ調整を施し、下口縁及び頸部外面はナデている。内面は右下がりのハケ調整後、全体的にナデ調整を施す。	
16	〃	〃 壺	16.4 (6.0)	— — —	二重口縁をもつが、上部は欠損する。	外面は丁寧なナデ、内面は右下がりのハケ調整を施す。端部外面には指頭圧痕が残る。	
17	〃	〃 壺	— (23.0)	— — 5.6	平底から直線気味に立ち上がる。胴部中位で最大径をもつ。	外面は叩き調整後、右下がりのハケ調整を施す。さらに中位はヘラ磨き、下半はナデ調整を施す。内面はハケ調整後、ナデを行う。	

Tab. 3 遺物観察表

挿図番号	遺構番号	器種	口径 器高 胴径 底径 法量 (cm)	形態・文様	手法	備考
18	ST1	弥生土器 壺	— (31.0) 31.2 —	壺棺の可能性が高い。最大径を胴部中位に有す。	外面は水平の叩き調整後、内面は右下がりのハケ調整後、いずれもナデを行う。	部分的に煤ける。
19	〃	〃 甕	14.8 (6.2) — —	口縁部は「く」の字状に屈曲して外反する。口唇部は丸くおさまる。	外面はほぼ水平に叩き調整を施す。口縁部内面は右下がりのハケ調整、頸部及び胴部内面はナデ調整を施す。	
20	〃	〃 甕	13.6 (9.5) — —	内湾して立ち上がり、口縁部は「く」の字状に屈曲して外反する。口唇部は外傾して面をなす。	外面は叩き調整を施すが、口縁部は叩き目をナデ消す。口縁部内面はハケ調整をナデ消し、胴部内面はタテナデを施す。部分的に指頭圧痕が残る。	
21	〃	〃 甕	13.6 (7.5) — —	〃	外面は水平に叩き調整を施すが、口縁部は叩き目をナデ消す。口縁部内面はハケ調整、胴部内面はヘラ削りを行う。	
22	〃	〃 甕	13.4 (10.3) — —	〃	外面は水平に叩き調整を施すが、口縁部は叩き目をナデ消す。内面は口縁部から胴部上半にかけて右下がりのハケ調整を施す。また部分的にナデがみられる。	
23	〃	〃 甕	15.2 (6.5) — —	内湾して立ち上がり、口縁部は「く」の字状に屈曲して外反する。口縁端部は下方へつまみ出し、口唇部は外傾して面をなす。	口縁部外面は、荒いハケ原体によるハケ調整を縦方向に施した後、ヨコナデを施す。胴部外面は叩き調整後、タテハケを施す。内面は不定方向のハケ調整を施す。	
24	〃	〃 甕	16.4 (6.6) — —	口縁部は「く」の字状を呈し、口縁端部で外反する。	外面は丁寧なタテハケを、内面は右下がりのハケ調整を施す。また胴部内面はハケ目をナデ消している。	
25	〃	〃 甕	12.9 (6.9) — —	肩の張らない上胴部から口縁部は緩やかに外反する。口唇部は外傾して面をなす。	外面は水平に叩き調整を施すが、口縁部は叩き目をナデ消す。内面は口縁部を右下がりのハケ調整で仕上げ、頸部及び胴部はハケ調整をナデ消す。	
26	〃	〃 甕	13.0 (7.0) — —	肩の張らない上胴部から口縁部は緩やかに外反する。口縁端部は下方へつまみ出され肥厚して面をなす。	〃	
27	〃	〃 甕	12.8 (10.2) — —	肩の張らない上胴部から口縁部は緩やかに外反する。口唇部は外傾して面をなす。	口縁部外面は、荒いハケ原体によるハケ調整を縦方向に施す。頸部及び胴部外面は叩き調整後、不定方向のハケ調整を施す。口縁部内面はヨコハケ、頸部から胴部内面にかけては比較的強いハケ調整を施し、下半にはナデがみられる。	
28	〃	〃 甕	11.2 (9.0) — —	内湾して立ち上がり、口縁部は丸味を帯びて外反する。口唇部は面をなす。	口縁部外面は、右下がりのハケ調整、胴部外面は叩き調整後、右下がりのハケ調整を施す。口縁部内面は右下がりのハケ調整、頸部及び胴部内面は、ハケ調整後タテナデを行う。	
29	〃	〃 甕	14.3 (20.6) — —	丸味を帯びた胴部から口縁部は「く」の字状に屈曲して外反する。口縁端部は、上・下に僅かに肥厚して口唇部は面をなす。	口縁部外面はタテハケ、端部にはヨコナデを、胴部外面は叩き調整後、部分的にハケ調整を施す。口縁部内面は不定方向のハケ調整後、端部にヨコナデを、胴部内面はハケ調整後、タテナデを行う。	一部煤ける。
30	〃	〃 甕	13.8 24.0 16.3 2.7	平底より内湾して立ち上がり、口縁部は「く」の字状に展曲して外反する。口唇部は外傾して面をなす。	口縁部外面は叩き調整後、タテハケを施す。胴部外面は左下がりの叩きを、下方2/3あたりからはタテハケを施す。口縁部内面は右下がりのハケ調整を、胴部内面は指頭による丁寧なタテナデを行う。	全体的に煤ける。
31	〃	〃 甕	13.8 13.6 13.0 4.0	〃	口縁部外面は叩き調整後、ナデ調整を施す。胴部外面は叩き調整を施し、下半はその後ハケ調整を施す。口縁部内面は右下がりのハケ調整を施す。胴部内面の上半はハケ調整、下半はナデ調整を施す。	

Tab. 4 遺物観察表

挿図番号	遺構番号	器種	口径 器高 胴径 底径 法量 (cm)	形態・文様	手法	備考
32	S T 1	弥生土器 甗	13.2 18.7 14.4 —	平底から内湾して立ち上がり、口縁部は「く」の字状に屈曲して外反する。口唇部は外傾して面をなす。	口縁部外面は叩き調整の後でハケ調整を行い、さらにナデ調整を施す。胴部外面は水平の叩き調整、下半はその後タテハケを施す。内面には荒いハケ原体による右下がりのハケ調整がみられ、下半はナデている。	一部煤ける。
33	〃	〃 甗	13.8 25.4 18.1 2.5	〃	口縁部及び頸部外面は、右下がりのハケ調整後ナデる。胴部外面は叩き調整、下半は丁寧なナデ調整を施す。口縁部内面はハケ調整を、胴部内面はハケ調整後、下半はナデ調整を施す。	全体的に煤ける。
34	〃	〃 甗	17.4 (21.0) 26.6 —	内湾して立ち上がり、口縁部は「く」の字状に強く屈曲して外反する。	口縁部外面は右下がりのハケ調整を、口縁端部はヨコナデを施す。胴部外面は叩き調整後、ナデ調整を施す。内面は右下がりのハケ調整後ナデる。	
35	〃	〃 甗	— (30.0) 22.8 4.0	平底から内湾して立ち上がり、口縁部は「く」の字状に屈曲して外反する。	口縁部外面は丁寧なタテハケ、胴部から底部外面にかけては、入念な叩き調整後ナデ、また下半は左下がりのハケ目を認める。口縁部内面は右下がりの丁寧なハケ調整後ナデる。胴部から底部内面にかけてナデ調整を施す。また部分的に指頭圧痕をとどめる。	一部煤ける。
36	〃	〃 甗	24.0 (14.8) — —	内湾して立ち上がり、口縁部は「く」の字状に屈曲して外反する。口唇部には3条の沈線がみられ、若干下方に肥厚して面をなす。	外面は叩き調整後、右下がりのハケ調整、さらにナデを行う。内面はハケ調整後ナデる。なお口縁端部内外面はヨコナデを施す。	部分的に煤ける。
37	〃	〃 甗	— (4.7) — —	平底から内湾気味に立ち上がる。	外面は底部まで入念に叩き調整を施し、内面には指頭圧痕を残す。	
38	〃	〃 甗	— (10.2) — 3.2	突出気味の底部より直線的に立ち上がる。	外面は水平に叩き調整を施し、その後タテハケを行う。内面はハケ調整後、ナデ調整で仕上げる。	若干煤ける。
39	〃	〃 甗	— (14.5) — 4.2	平底から内湾して立ち上がる。	外面は水平の叩き調整、内面は指頭によるナデ調整を施す。	一部煤ける。
40	〃	〃 甗	— (7.0) 16.7 2.6	〃	外面は水平に叩き調整を施し、その後タテハケを行う。内面はハケ→ナデ→ヘラ削りの順で仕上げる。	
41	〃	〃 甗	— (11.2) — 3.0	平底から内湾気味に立ち上がる。	中位外面は右下がりの、下端は横方向の叩き調整を施し、さらにタテハケを行う。内面は指頭による強いナデ調整を施す。	全面煤ける。
42	〃	〃 甗	— (10.5) — 2.5	平底から内湾して立ち上がる。	外面は水平に叩き調整を施し、その後一部にハケ調整を施す。内面はハケ調整後、ナデ調整を施す。	一部煤ける。
43	〃	〃 甗	— (14.6) — 2.4	〃	外面は水平の叩き調整後、タテハケを行う。内面はハケ調整後ナデ調整を施し、底部に近づくにつれナデ調整が丁寧になる。	〃
44	〃	〃 甗	— (17.0) — 5.5	〃	外面は水平の叩き調整後、下半はハケ調整を施す。内面は不定方向のハケ調整の後ナデる。	若干煤ける。
45	〃	〃 甗	— (7.1) — 3.0	突出気味の底部より内湾気味に立ち上がる。	外面は叩き調整後、ハケ調整を施す。内面は入念なヘラ磨きを行う。	〃
46	〃	〃 甗	— (21.5) — 5.4	平底から内湾して立ち上がる。	外面は水平の叩き調整後、下半はさらに右下がりのハケ調整を施す。内面はハケ調整後、下方はナデ調整を施す。	〃

Tab. 5 遺物観察表

挿図番号	遺構番号	器種	口径 器高 胴径 底径 法量 (cm)	形態・文様	手法	備考
47	ST1	弥生土器 甕	— (22.2) — 6.0	平底から内湾して立ち上がる。	外面は叩き調整後、不定方向のハケ調整を施す。内面はハケ調整後、底部を中心にナデる。	一部煤ける。
48	〃	〃 甕	— (22.1) 18.0 —	平底から内湾して立ち上がる。底部欠損。	外面は叩き調整後、下半はタテハケを行う。内面は右下がりのハケ調整の後ナデる。	〃
49	〃	〃 甕	— (11.5) — 2.5	平底から内湾して立ち上がる。	外面は底部まで入念に叩き調整を施し、下半にはさらに右下がりのハケ調整を施す。内面は荒いハケ原体によるハケ調整を施す。	全体的に煤ける。
50	〃	〃 甕	— (11.8) — 3.7	〃	外面は底部まで入念に叩き調整を施し、下半にはさらにハケ調整を施す。内面は右下がりのハケ調整後、タテナデを行う。	部分的に煤ける。
51	〃	〃 甕	— (15.0) — 2.0	〃	外面は叩き調整を施し、下半にはさらに右下がりのハケ調整を施す。内面は、荒いハケ原体による不定方向のハケ調整を施す。	一部煤ける。
52	〃	〃 甕	— (16.5) — 1.0	平底をとどめる底部から内湾して立ち上がる。	外面は水平の叩き調整後、タテナデを行う。内面は右下がりのハケ調整後ナデる。	全体的に煤ける。
53	〃	〃 甕	— (5.6) — 2.7	平底から内湾して立ち上がる。	外面は叩き調整後、丁寧にナデ調整を施す。内面はナデ調整で仕上げる。	半面煤ける。
54	〃	〃 甕	— (18.0) 29.0 1.5	平底をとどめる底部から内湾して立ち上がる。	外面は不定方向の叩き調整後、ナデ調整を施す。内面は右下がりのハケ調整後ナデる。	一部煤ける。
55	〃	〃 甕	— (18.0) — (3.5)	平底から内湾して立ち上がる。	外面は不定方向の叩き調整後、ナデ調整を施す。内面には指頭によるナデ調整がみられる。	全体的に煤ける。
56	〃	〃 甕	— (15.5) — 2.0	〃	外面は不定方向の叩き調整後、部分的にナデる。内面は指頭によるナデ調整を施す。	〃
57	〃	〃 甕	— (8.1) — 4.0	〃	外面は叩き→ハケ→ナデの順で仕上げる。内面にはタテナデがみられる。	一部煤ける。
58	〃	〃 甕	— (12.4) — 3.6	平底から内湾気味に立ち上がる。	〃	〃
59	〃	〃 甕	— (12.2) — 2.5	平底から内湾して立ち上がる。	外面は叩き→ハケ→ナデの順で仕上げる。内面は右下がりのハケ調整後ナデる。	一部煤ける。
60	〃	〃 甕	— (12.5) — 4.5	〃	〃	全体的に煤ける。
61	〃	〃 甕	— (16.3) — 8.6	〃	〃	一部煤ける。
62	〃	〃 甕	— (13.4) — 4.4	〃	外面はナデ調整を施し、内面はハケ調整後、左下がりのナデ調整を施す。	〃
63	〃	〃 甕	— (3.8) — 5.4	平底から立ち上がる。	外面は丁寧なヘラ磨きを施し、内面は右下がりのハケ調整後ナデる。	〃
64	〃	〃 甕	— (5.5) — 2.0	平底をとどめる底部から内湾して立ち上がる。	外面は丁寧なヘラ磨きを施し、内面はナデ調整を施す。	一部煤ける。

Tab. 6 遺物観察表

挿図番号	遺構番号	器種	法量 (cm)	口径 器高 胴径 底径	形態・文様	手法	備考
65	ST1	弥生土器 甕	(2.2)	— — 3.4	突出気味の底部を有す。	外面は叩き調整後ナデる。内面はナデ調整を施す。底部外面には木葉圧痕がみられる。	一部煤ける。
66	〃	〃 甕	(2.2)	— — 2.3	〃	外面は左下がりの叩き調整後ナデる。内面はナデ調整を施し、一部指頭圧痕が残る。底部外面には木葉圧痕がみられる。	若干煤ける。
67	〃	〃 甕	(1.9)	— — 3.9	〃	〃	
68	〃	〃 甕	(5.2)	— — 5.0	平底から内湾して立ち上がる。	外面は左下がりの叩き調整後ナデる。内面は不定方向のハケ調整を施す。底部外面には木葉圧痕がみられる。	若干煤ける。
69	〃	〃 甕	(1.2)	— — 4.0	平底である。	底部外面には木葉圧痕がみられる。	
70	〃	〃 鉢	15.2 8.3	— — 3.6	突出気味の底部から内湾して立ち上がり、口唇部は面をなす。	外面は左下がりに叩き調整後ナデる。内面はハケ調整を入念に施す。底部外面には木葉圧痕がみられる。	
71	〃	〃 甕	12.2 21.9 16.2	— — 2.5	平底から内湾気味に立ち上がり、口縁部で「く」の字状に屈曲して外反する。口唇部は外傾して面をなす。底部には焼成前に穿った孔を認める。	外面は水平に叩き調整を施し、その後口縁部はタテハケ、胴部はナデを行う。さらに下半にはタテハケがみられる。内面はハケ調整を施し、その後下半はナデている。	一部煤ける。
72	〃	〃 甕	(8.2)	— — 2.5	平底から内湾して立ち上がる。底部には焼成前に穿った孔を認める	外面は右下がりの叩き調整後ナデる。内面はナデ調整を施す。	〃
73	〃	〃 甕	(9.5)	— — 2.2	平底をとどめる底部から内湾気味に立ち上がる。底部には焼成前に穿った孔を認める。	外面はタテハケ後ナデ調整を施す。内面はナデて、部分的に指頭圧痕を残す。	〃
74	〃	〃 甕	(10.1)	— — 1.5	〃	外面は不定方向の叩き調整後ナデを行い、部分的に右下がりのハケ調整を施す。内面はナデて部分的に指頭圧痕を残す。	
75	〃	〃 甕	(14.5)	— — 1.2	尖り気味の底部から内湾気味に立ち上がる。底部には焼成前に穿った孔を認める。	外面は叩き調整後ナデを行い、内面は指頭によるナデ調整を施す。	一部煤ける。
76	〃	〃 甕	(5.5)	— — 2.0	突出気味の底部から内湾して立ち上がる。底部には焼成前に穿った孔を認める。	外面は不定方向の叩き調整後ナデる。内面はハケ調整後、孔のまわりを中心にナデている。	
77	〃	〃 鉢	(5.9)	— — —	低脚を有し、内湾して立ち上がる。底部欠損。	外面は叩き調整後、ハケ調整を施す。内面はナデ調整を施す。	
78	〃	〃 鉢	(2.6)	— — 5.1	つまみ出しによる低い脚台状の底部をもつ。	外面は叩き調整後ナデる。内面には指頭圧痕がみられる。	
79	〃	〃 鉢	21.0 7.5	— — 4.6	平底から緩やかに立ち上がり、口唇部は丸くおさまる。	内外面共に摩擦が著しいが、底部外面に若干叩き目が残る。	
80	〃	〃 鉢	20.5 10.0	— — 3.0	突出した平底から内湾して立ち上がり、口唇部は僅かに凹状の面をなす。	外面は叩き調整後、上半はタテハケを施す。内面は右下がりのハケ調整を、下半にはナデ調整を施す。なお口縁部付近の内外面はヨコナデで入念に仕上げる。	部分的に煤ける
81	〃	〃 鉢	10.2 (10.0)	— — —	平底から内湾して立ち上がり、口唇部は僅かに凹状の面をなす。底部欠損。	口縁部外面はヨコナデを行い、体部外面は叩き調整後、右下がりのハケ調整を施す。内面は右下がりの入念なハケ調整を施す。	一部煤ける。
82	〃	〃 鉢	16.6 (8.0)	— — —	内湾して立ち上がり、口唇部は丸くおさまる。	外面は叩き調整後、ナデ調整を施し、さらに口縁端部はハケ調整を施す。内面は右下がりの丁寧なハケ調整を施す。	若干煤ける。

Tab. 7 遺物観察表

挿図番号	遺構番号	器種	口径 器高 胴径 底径 法量 (cm)	形態・文様	手法	備考
83	S T 1	弥生土器鉢	9.5 (4.2) — —	緩やかに立ち上がり、口唇部は丸くおさまる。底部欠損。	外面は叩き調整後ナデている。内面は右下がりのハケ調整後ナデを行い、部分的に指頭圧痕を残す。	
84	〃	〃鉢	18.0 (7.4) — —	平底から内湾して立ち上がり、口唇部は凹状の面をなす。底部欠損。	口縁端部は内外面共にヨコナデを施す。外面は叩き調整後ナデる。内面は左下がりの丁寧なハケ調整を施す。	
85	〃	〃鉢	13.0 6.7 — 3.9	突出気味の底部から内湾して立ち上がり、口唇部は尖り気味におさまる。	外面は叩き調整後ナデる。内面は丁寧なハケ調整後、底部にはナデ調整を入念に行う。	
86	〃	〃鉢	16.8 6.8 — 2.0	平底より内湾して立ち上がり、口唇部は強く外傾して面をなす。	外面は左下がりの叩き調整後ナデ調整を施し、上方部には叩き目が残る。内面は丁寧なナデ調整を施す。	
87	〃	〃鉢	19.3 9.5 — 5.6	平底から内湾して立ち上がり、口唇部は僅かに凹状の面をなす。	外面は叩き調整後、叩き目を全体的にナデ消す。下方には粘土帯の接合痕がみられ、その上を入念にナデ消している。口縁端部内面は右下がりのハケ調整をナデ消す。	一部煤ける。
88	〃	〃鉢	17.9 5.3 — 1.0	僅かに残る平底から内湾して立ち上がり、口唇部は外傾して面をなす。	外面は叩き調整後、全面をナデ調整で仕上げる。内面はハケ調整後、丁寧なヘラ磨きを行う。	
89	〃	〃鉢	(4.4) — 2.4	平底から内湾して立ち上がる。	外面は水平の叩き調整後ナデる内面はナデ調整を施し、下半にはヘラ磨きを認める。	一部煤ける。
90	〃	〃鉢	23.0 (6.7) — —	内湾して立ち上がり、口唇部は丸くおさまる。	外面は左下がりの叩き調整後ナデる。内面は丁寧なヘラ磨きを行う。	
91	〃	〃鉢	19.6 6.6 — 5.2	突出気味の底部から内湾して立ち上がり、口唇部は外傾して面をなす。	外面は叩き調整後ナデる。底部は指頭により押し出され突出する。内面はハケ調整後、左下がりのヘラ磨きを行う。	
92	〃	〃鉢	20.0 (7.0) — —	緩やかに立ち上がり、口唇部は僅かに凹状の面をなす。底部欠損。	外面は叩き調整後、丁寧にナデている。内面はヘラ磨きを行う。	
93	〃	〃鉢	16.0 8.0 — —	内湾して立ち上がり、口唇部は外傾して面をなす。底部欠損。	口縁端部は内外面共にヨコナデを施す。体部外面は叩き調整後ナデを行い、さらに下半は右下がりのハケ調整を施す。内面はヘラ磨きを行う。	
94	〃	〃鉢	4.0 (2.5) — 4.0	突出気味の平底より内湾して立ち上がる。	外面はナデ調整を施す。内面はハケ調整後ナデている。	一部煤ける。
95	〃	〃鉢	10.6 4.7 — 4.0	平底から緩やかに立ち上がり、口唇部は尖り気味におさまる。	外面はナデ調整を施し、部分的に指頭圧痕を残す。内面は丁寧なハケ調整を施す。	〃
96	〃	〃鉢	11.5 6.6 — 1.5	平底をとどめる底部から内湾して立ち上がり、口唇部は尖り気味におさまる。	外面はナデ調整を施し、内面は右下がりのハケ調整後ナデる。	全体的に煤ける
97	〃	〃鉢	10.8 7.0 — 2.6	突出気味の平底から直線的に立ち上がり、口縁部付近でやや内湾する。口唇部は尖り気味におさまる。	外面はナデ調整を施し、内面は不定方向のハケ調整を施す。	
98	〃	〃鉢	18.2 (6.2) — —	内湾気味に立ち上がり、口唇部は凹状の面をなす。底部欠損。	外面はナデ調整を施し、部分的に指頭圧痕を残す。内面は右下がりの細い連続するハケ調整を施す。	
99	〃	〃鉢	12.5 9.1 — 4.4	平底をとどめる底部から内湾して立ち上がり、口唇部は凹状の面をなす。	外面はナデ調整を、内面は右下がりの丁寧なハケ調整を施す。	
100	〃	〃鉢	13.8 (6.9) — —	内湾して立ち上がり、口唇部は内傾して面をなす。底部欠損。	外面はナデ調整を施し、部分的に指頭圧痕を認める。内面は右下がりのハケ調整を施し、下部を丁寧にナデている。	

Tab. 8 遺物観察表

挿図番号	遺構番号	器種	口径 器高 胴径 底径 法量 (cm)	形態・文様	手法	備考
101	ST1	弥生土器鉢	20.0 8.0 — 4.5	突出気味の底部から内湾して立ち上がり、口唇部は外傾して面をなす。	外面はナデ調整、内面は右下がりのハケ調整後ナデている。	
102	〃	〃鉢	(6.0) — 3.5	平底から内湾して立ち上がる。	内外面共にナデ調整を施す。内面には指頭圧痕を認める。	
103	〃	〃鉢	10.7 7.4 — 2.8	平底から内湾して立ち上がり、口唇部は面をなす。	外面はナデ調整により丁寧に仕上げられ、内面はヘラ削りの後丁寧にナデ調整が施されている。	
104	〃	〃鉢	10.0 9.0 — 4.2	平底から内湾して立ち上がり、口唇部は僅かに凹状の面をなす。	外面は丁寧にナデ調整を施し、内面は右上がりのハケ調整後、ヘラ磨きを入念に行う。	
105	〃	〃鉢	21.1 6.3 — 4.0	平底から内湾して立ち上がり、口唇部は凹状の面をなす。	内外面共に丁寧にヘラ磨きを施す。また口縁端部内外面には、ヨコナデを入念に行う。	一部煤ける。
106	〃	〃鉢	11.8 (4.3) — —	内湾して立ち上がり、口唇部は内傾して面をなす。底部欠損。	内外面共にナデ調整を施し、内面には指頭圧痕を残す。	外面には靱痕がみられる。
107	〃	手捏ね器土	4.2 5.8 — 1.0	僅かに平底をとどめる底部から立ち上がる。	内外面共にナデ調整を施し、部分的に指頭圧痕を残す。	
108	〃	土製支脚	(11.4) — 7.9	支脚欠損。	内外面共にナデ調整を入念に施し、指頭圧痕が顕著にみられる	一部煤ける。
109	〃	石疱丁		全長8.2cm、全幅5.2cm、全厚1.4cm重量80gを測る。石質は砂岩で、両側に抉り痕が認められる。	打製である。	
110	ST2	弥生土器壺	17.6 (5.5) — —	口縁部は漏斗状に外反し、口縁端部は下方に肥厚する。口唇部は外傾して面をなし、左下がりの列点文を配す。	内外面共にハケ調整を施し、口縁端部は内外面共によくナデる。	
111	〃	〃壺	22.0 (16.5) — —	球状の胴部上端から口縁部はラッパ状に大きく外反し、口縁端部は下方に肥厚する。口唇部は面をなし、波状文がみられる。	口縁端部は内外面共にヨコナデを施す。口縁部外面は右下がりの丁寧にハケ調整、頸部外面はナデ調整、胴部外面は叩き調整後、右下がりの丁寧にハケ調整を施す。口縁部及び胴部中心内面は、右下がりのハケ調整をナデ消す。胴部内面は上半を入念にナデ、全体的に指頭圧痕を残す。	
112	〃	〃甗	16.4 (5.6) — —	漏斗状に開く口縁部を有す。口縁端部は肥厚し、口唇部はぼぼ丸くおさまる。	頸部外面はタテハケを施し、内面には指頭圧痕を残す。	
113	〃	〃甗	16.6 (5.4) — —	口縁部は「く」の字状に外反し、口唇部は外傾して面をなす。	外面は叩き調整後、ハケ調整を施す。内面は右下がりのハケ調整後ナデている。	
114	〃	〃甗	11.0 (6.4) — —	肩の張らない上胴部から緩やかに屈曲して口縁端部で外反する。口唇部は外傾して面をなす。	外面は水平に叩き調整を施す。内面は右下がりの丁寧にハケ調整を施す。	一部煤ける。
115	〃	〃甗	(3.8) — 3.6	平底を有す。	外面は水平に叩き調整を、内面は右下がりのハケ調整を施す。	
116	〃	〃甗	(4.2) — 3.0	平底を有す。	底部外面に格子状の叩き目を認める。	
117	〃	〃甗	(4.0) — 4.0	平底から内湾して立ち上がる。	内外面共に摩耗が著しい。	一部煤ける。

Tab. 9 遺物観察表

挿図番号	遺構番号	器種	法量 (cm)	口径 器高 胴径 底径	形態・文様	手法	備考
118	S T 2	弥生土器 甕	— (5.6) — 2.6	—	平底から内湾して立ち上がる。	内外面共に摩耗が著しい。外面は叩き調整後、右下がりのハケ調整を施す。内面はナデ調整を行う。	一部煤ける。
119	〃	〃 甕	— (7.4) — 4.0	—	平底から直線気味に立ち上がる。	外面は叩き調整後、右下がりのハケ調整を施す。内面はナデ調整を行う。	全面煤ける。
120	〃	〃 鉢	10.2 (4.1) — —	—	丸味を帯びて立ち上がり、口唇部は内傾して丸くおさまる。	外面は叩き調整後、ハケ調整を施す。内面は右下がりのハケ調整を施す。	
121	〃	〃 鉢	— (3.9) — 1.3	—	丸底気味の底部から内湾して立ち上がる。	内外面共に摩耗が著しいが、外面に僅かに叩き目をとどめる。	
122	〃	砥石	—	—	石質は砂岩で、全長180cm、全幅8.0cm、全厚4.4cm、重量795gを測る。		
123	S B 1 P 8	土師器 杯	— (0.9) — 7.0	—	ベタ高台を有す。	底部外面には糸切り痕がみられる。	
124	S K 1	弥生土器 甕	— (8.2) — —	—	口縁部は「く」の字状に外反し、口唇部は凹状の面をなす。	外面は叩き調整後ナデている。内面は、口縁部を右下がりのハケ調整、胴部上半をハケ調整後ナデを行う。	
125	〃	〃 甕	15.0 19.5 — 2.0	—	平底をとどめる底部から内湾して立ち上がり、口縁部は「く」の字状に屈曲して外反する。口唇部は凹状の面をなす。	外面は水平の叩き調整後、下半を丁寧なナデている。内面は、口縁部及び胴部上端に右下がりのハケ調整、以下タテナデを入念に施す。	全面煤ける。
126	〃	〃 鉢	11.2 (4.7) — —	—	口縁部は如意状に外反し、口唇部は丸くおさまる。底部欠損。	内外面共にハケ調整を施し、内面はさらにハケ目をナデ消す。	
127	〃	手捏ね 土器	— (3.0) — —	—	丸底気味の底部から内湾して立ち上がる。	外面は右下がりのハケ調整、内面には指頭圧痕が残る。	一部煤ける。
128	S K 2	弥生土器 壺	— (27.0) — —	—	壺棺の可能性を有す。僅かに残る平底から内湾して立ち上がり頸部に至る。胴部中位に最大径を有す。	外面は右下がりの叩き調整後、荒いハケ原体によるハケ調整を施す。内面はハケ調整をナデ消している。	〃
129	〃	〃 甕	13.6 17.9 14.0 1.0	—	尖底気味の底部から内湾して立ち上がる。口縁部は若干丸味を帯びて外反し、口唇部は外傾して面をなす。	外面は叩き調整後、下半はハケ調整を施す。内面は、口縁端部にヨコハケ、以下右下がりのハケ調整を施し、さらにハケ目をナデ消している。	部分的に煤ける
130	〃	〃 甕	13.2 22.0 16.0 2.0	—	平底をとどめる底部から内湾気味に立ち上がり、口縁部は「く」の字状に屈曲して外反する。口唇部は外傾して面をなす。	口縁部外面は叩き調整後ナデる。胴部外面は水平の叩き調整後、下半はタテハケを施す。内面は右下がりのハケ調整をナデ消す。	若干煤ける。
131	〃	〃 甕	14.7 23.6 26.8 3.5	—	平底から内湾して立ち上がり、口縁部は「く」の字状に屈曲して外反する。口唇部は外傾して面をなす。	〃	
132	〃	〃 甕	— 18.2 — 5.6	—	平底から内湾して立ち上がる。	外面はやや右下がりの叩き調整後、下半には荒いハケ原体によるハケ調整を施す。内面は細かいハケ原体によるハケ調整を施す。	
133	〃	〃 甕	— (9.6) — 3.0	—	平底から内湾気味に立ち上がる。	外面は叩き調整後ナデ、内面は丁寧なナデ調整を行う。	
134	〃	〃 甕	16.8 16.3 — 2.0	—	平底をとどめる底部から内湾して立ち上がる。	外面は水平方向に幅の広い叩き調整を施し、下半にはさらに右下がりのナデ調整がみられる。内面は左下がりのナデ調整を入念に施す。	全体的に煤ける
135	〃	〃 甕	— (15.2) — 1.0	—	僅かに平底を残した底部から内湾気味に立ち上がる。	外面は幅の広い叩き調整を施し底部を中心にナデている。内面はハケ調整後、左下がりのナデ調整を行う。	一部煤ける。

Tab. 10 遺物観察表

挿図番号	遺構番号	器種	口径 器高 胴径 底径 法量 (cm)	形態・文様	手法	備考
136	S K 2	弥生土器 甗	— (8.0) — 2.0	平底から内湾して立ち上がり、底部には焼成前に穿った孔を認める。	外面は叩き調整後、ハケ調整を施す。内面は左下がりのナデ調整を入念に行い、底部近くに指頭圧痕を残す。	
137	〃	〃 鉢	20.5 9.7 — 5.4	突出気味の底部から内湾して立ち上がり、口唇部は面をなす。	口縁部外面は右下がりのハケ調整を施し、また粘土帯接合痕を入念にナデ消している。内面は口縁部に丁寧なハケ、以下ナデている。	半面煤ける。
138	〃	〃 鉢	18.6 (6.5) — —	丸底気味の底部から内湾して立ち上がり、口唇部は尖り気味におさまる。一部底部欠損。	口縁端部外面に入念なヨコナデを認める。内面は右下がりのハケ調整をナデ消す。	一部煤ける。
139	〃	〃 鉢	27.0 10.3 — 1.6	平底をとどめる底部から内湾して立ち上がり、口唇部は外傾して面をなす。	内外面共に摩擦が著しいが、外面に右下がりのハケ調整をとどめる。	
140	S K 3	〃 甗	15.6 (12.5) — —	肩の張らない上胸部から口縁部は「く」の字状に強く屈曲して外反する。	外面は左下がりの叩き調整、頸部にはさらにナデを行う。内面は、荒いハケ原体による右下がりのハケ調整を、以下ナデを行う。	全体的煤ける。
141	〃	〃 甗	14.2 20.7 15.0 2.6	平底から内湾気味に立ち上がり、口縁部は若干丸味をもって外反する。一部底部欠損。	外面は左下がりの叩き調整後ナデで、下半にはさらに左下がりのハケ調整を施す。口縁部内面はハケ調整後ナデ、以下タテナデを行う。	一部煤ける。
142	〃	〃 甗	— (6.7) — 2.7	平底から内湾気味に立ち上がる。	外面は叩き調整後、内面はハケ調整後、内外面共にナデている。	若干煤ける。
143	〃	〃 甗	— (8.2) — 5.0	突出気味の底部から内湾気味に立ち上がる。	外面は水平方向に叩き、内面は右下がりのハケ調整をナデ消す。	一部煤ける。
144	〃	〃 鉢	— (4.0) — 2.6	平底から丸味を帯びて立ち上がる。	内外面共に摩擦が著しいが、底部内面はユビオサエで成形する。	
145	〃	〃 鉢	9.4 6.8 — 2.0	丸底気味の底部から内湾して直立に立ち上がる。口唇部は面をなす。	内外面共に摩擦が著しいが、指頭圧痕をとどめる。	
146	S K 4	骨 壺	— (14.6) — 8.6	須恵質である。中央部が僅かに凹む平底から直立気味に立ち上がり、上胸部で丸味をもって屈曲し頸部に至る。	外面にはロクロ目が顕著に残り、内面は粘土紐巻上げ痕を入念にナデで調整している。	
147	P 14	弥生土器 甗	11.6 (6.0) — —	口縁部は「く」の字状に屈曲して外反し、口唇部は僅かに凹状の面をなす。	口縁部外面は叩き目をナデ消し、以下叩き調整を施す。口縁部及び頸部内面は右下がりのハケ調整、以下タテナデを行う。	
148	〃	〃 甗	28.2 (7.4) — —	口縁部は「く」の字状に屈曲して外反し、端部は僅かに下方へ肥厚する。口唇部は外傾して面をなす。	外面は叩き調整後ナデを行い、内面は右下がりに丁寧なハケ調整後ナデている。	
149	S D 1	須恵器 杯 蓋	18.6 2.0 — —	平坦な頂部をなし、口縁部を僅かに下方へつまみ出す。口唇部は丸くおさまる。	口縁端部内外面には、強いヨコナデがみられる。	
150	〃	〃 壺	22.6 (3.3) — —	口縁端部は上下に肥厚して、口唇部は幅広い面をなす。	内外面共にロクロによるナデが残る。	
151	〃	〃 甗	18.0 (3.6) — —	口縁部は漏斗状に外反し、口唇部は外傾して面をなす。	〃	
152	〃	〃 杯	— (3.7) — 9.0	平底から内湾気味に立ち上がる。	〃	
153	〃	瓦質土器 鍋	22.0 (4.0) — —	口縁部は内傾し、口縁部下には凸帯を貼付する。	器面の摩擦が著しいが、外面にはヨコナデがみられる。	

Tab. 11 遺物観察表

挿図番号	遺構番号	器種	口径 器高 胴径 底径 (cm)	形態・文様	手法	備考
154	SD1	瓦質土器 鍋	17.5 (6.8) — — —	口縁部は若干肥厚して内傾し、口縁部下には凸帯を貼付する。	器面の摩耗が著しいが、外面にはヨコナデがみられる。	
155	〃	〃 鍋	— — — —	脚部で、断面は円形を呈し 2.5cmを測る。	摩耗が著しいが、部分的に指頭圧痕を残す。	
156	〃	〃 鍋	— — — —	脚部で、断面は円形を呈し 2.75cmを測る。	〃	
157	〃	〃 鍋	— — — —	脚部で、断面は円形を呈し 2.6cmを測る。	〃	

写 真 图 版



調査前全景（北西より）



調査前全景（北西より）



遺構検出状態（西より）



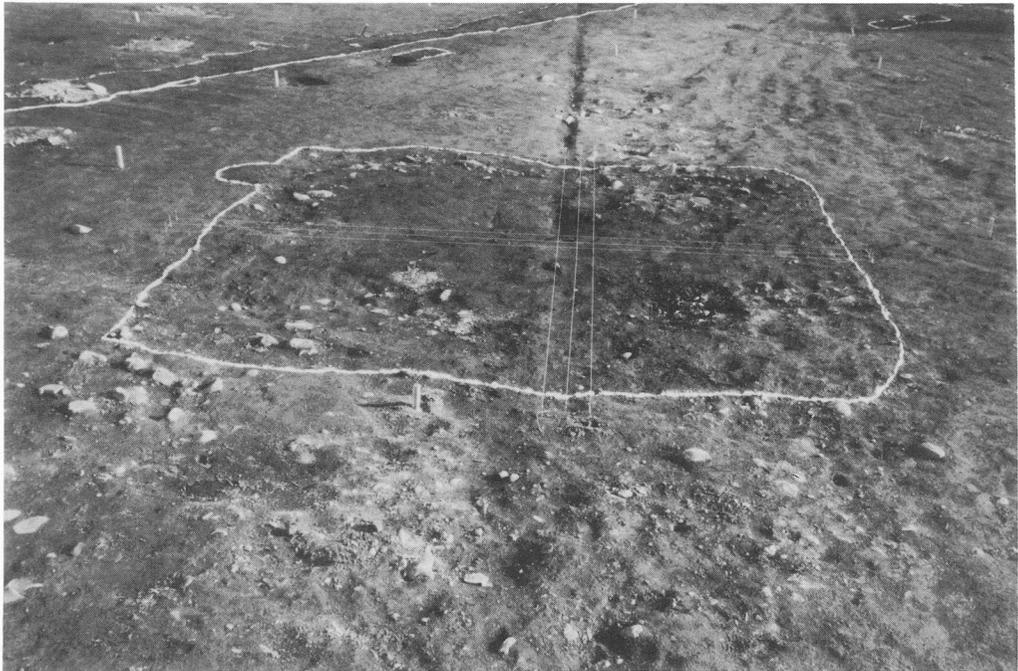
遺構完掘状態（西より）



調査区南壁セクション (北より)



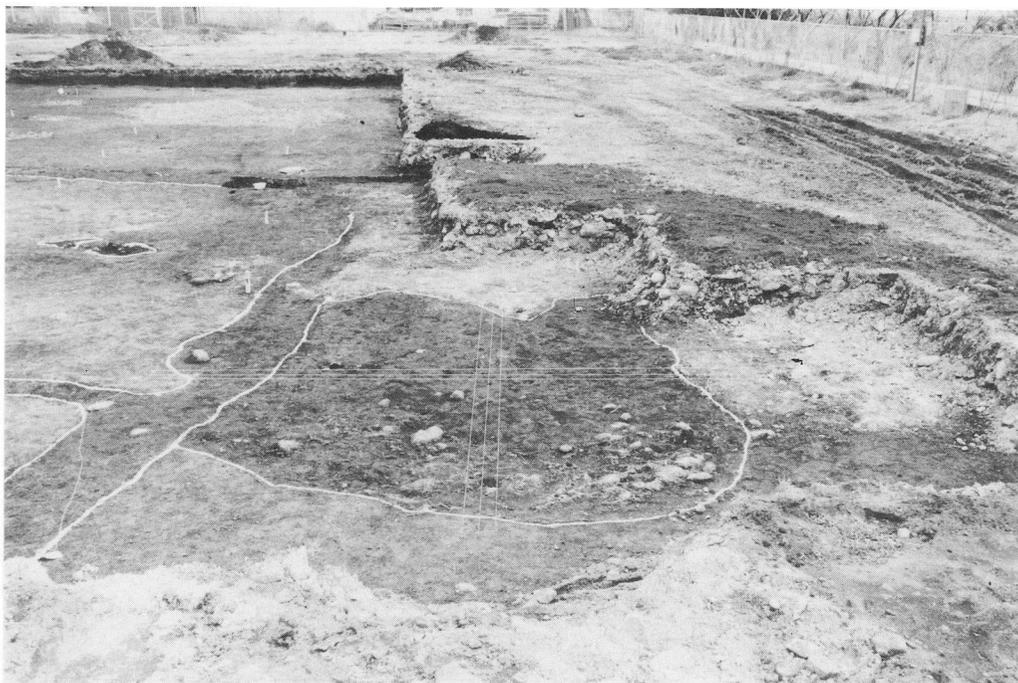
調査区南壁セクション (北より)



ST 1 検出状態



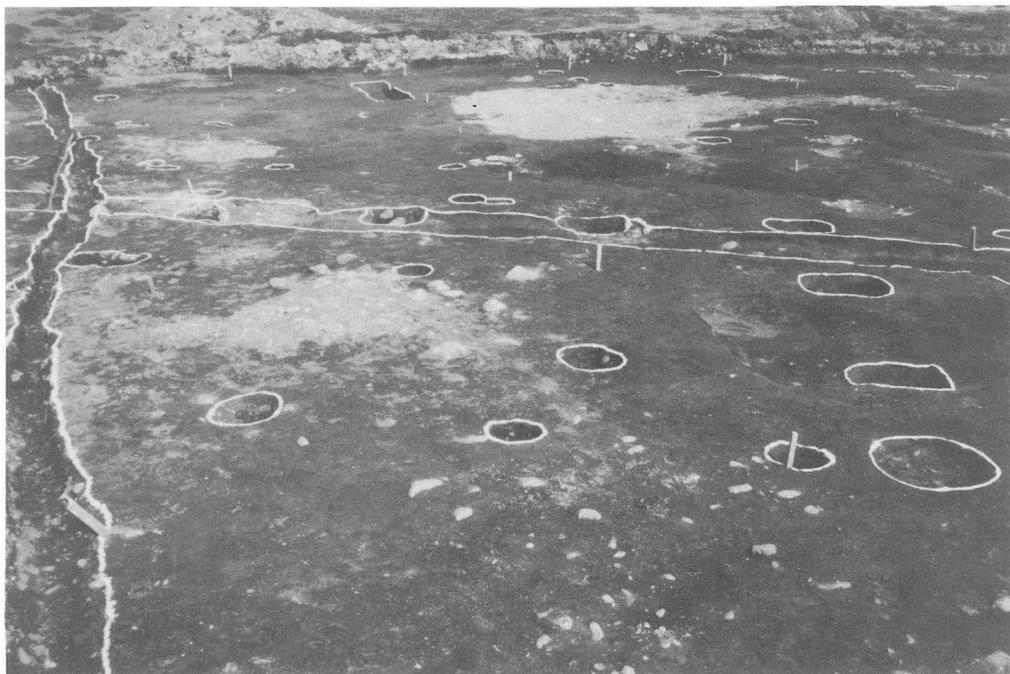
ST 1 完掘状態（西より）



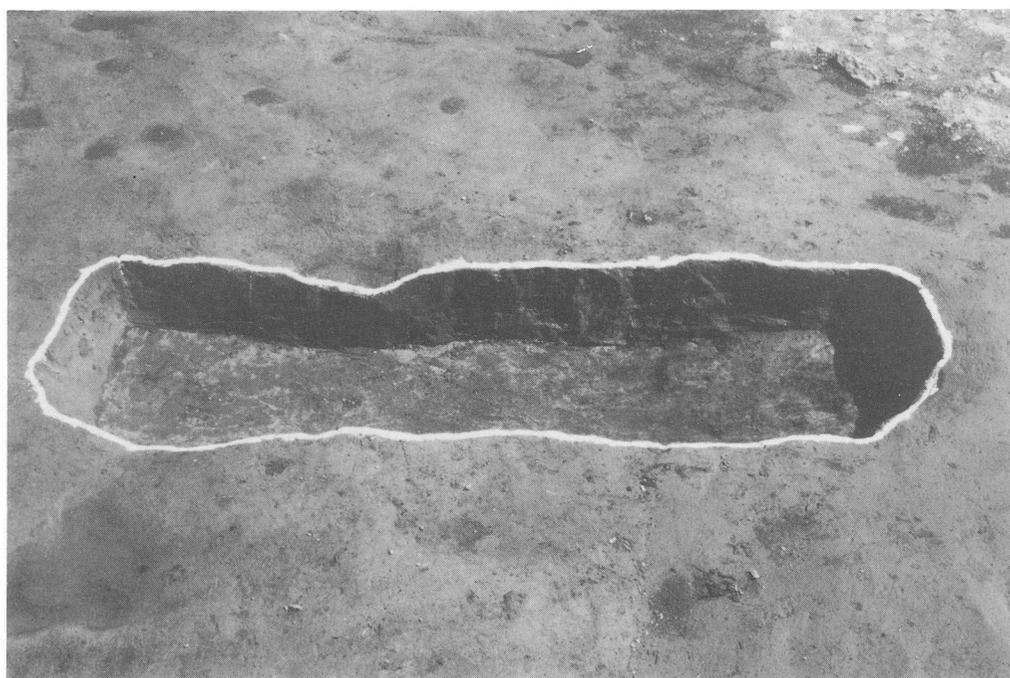
ST 2 検出状態 (西より)



ST 2 完掘状態 (北より)



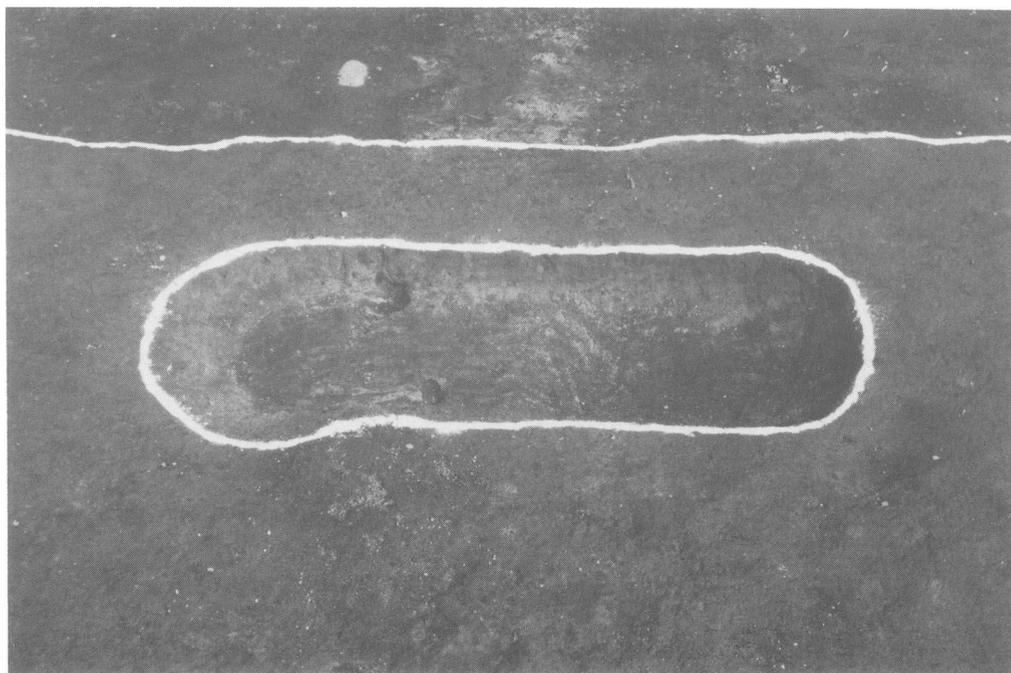
SB1・2 完掘状態 (西より)



SK1 完掘状態 (北より)



SK 2 完掘状態 (北より)



SK 4 完掘状態 (西より)



SD 1 完掘状態 (南より)



SD 2 完掘状態 (西より)



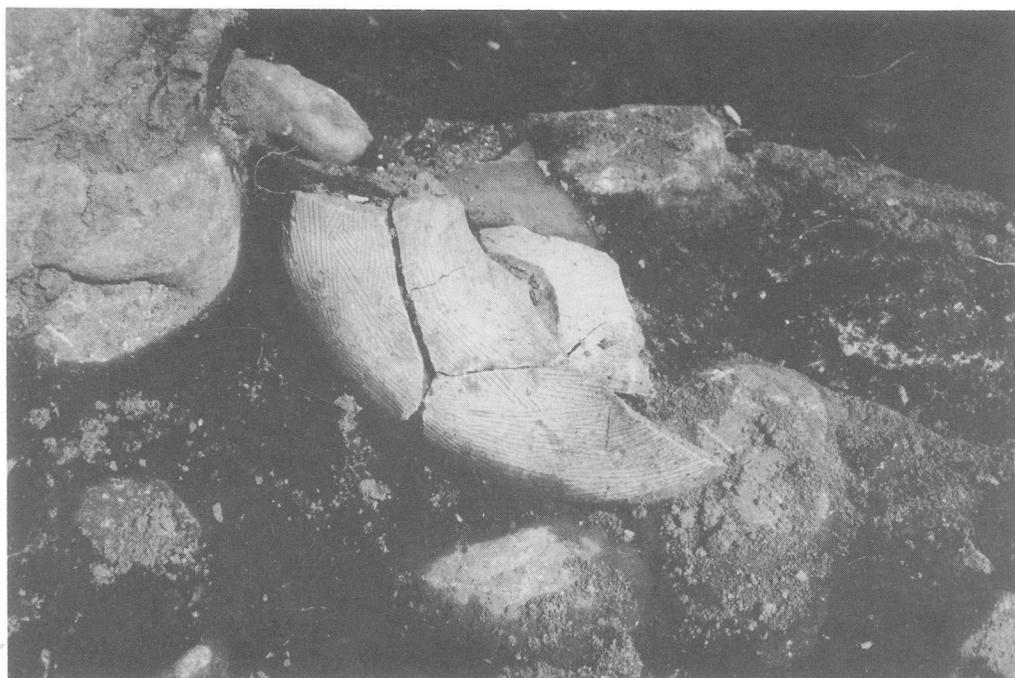
S T 1 遺物出土状態 (南より)



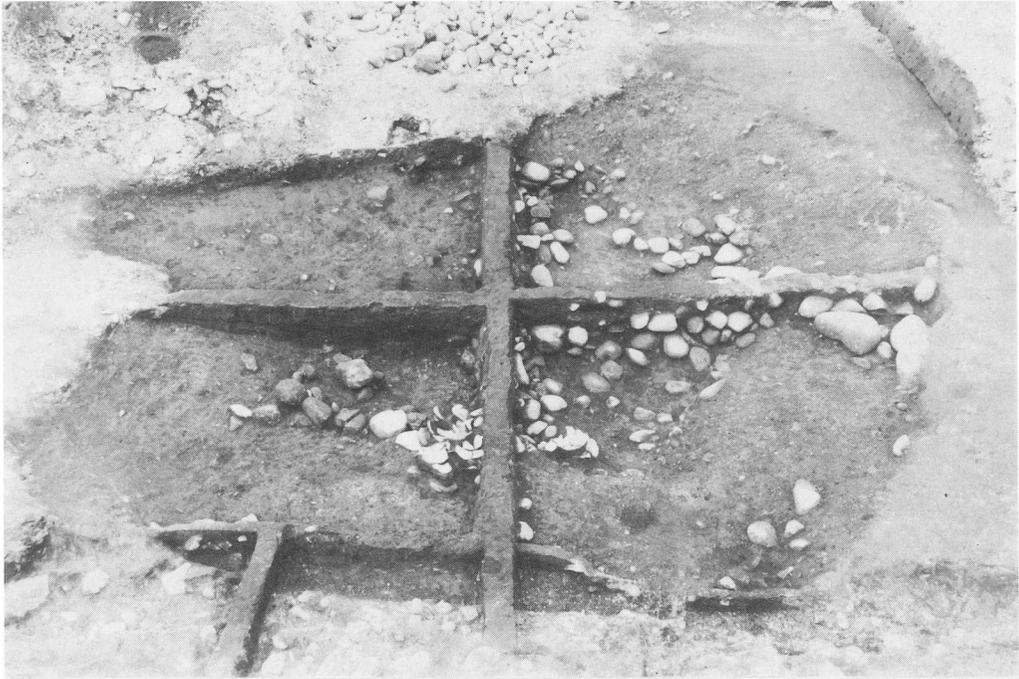
S T 1 遺物出土状態 (南東より)



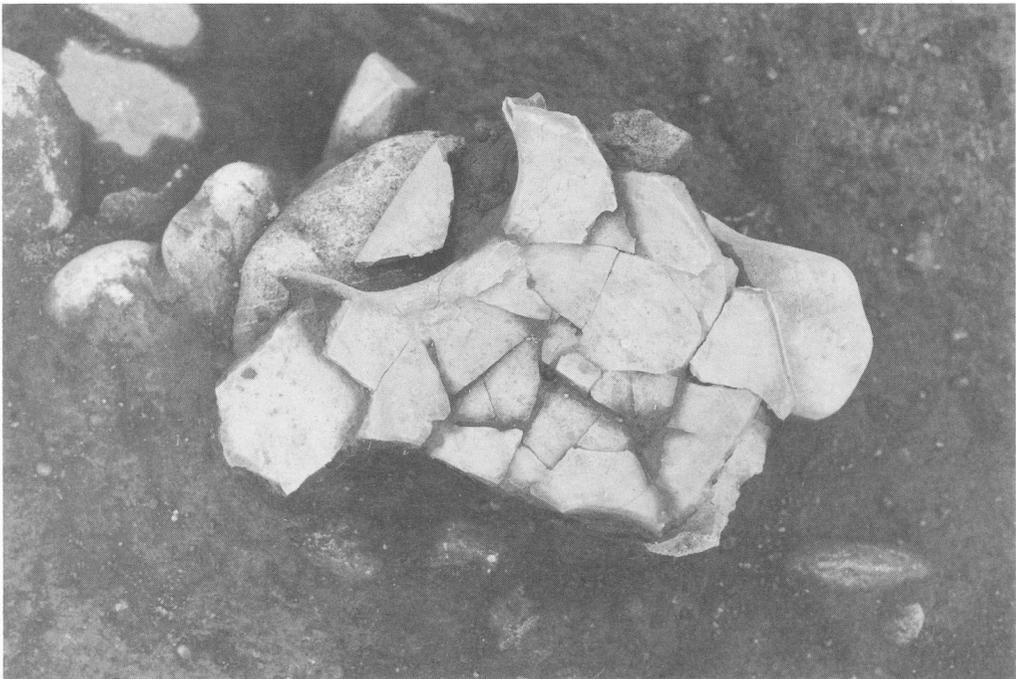
S T 1 遺物出土狀態



S T 1 遺物出土狀態



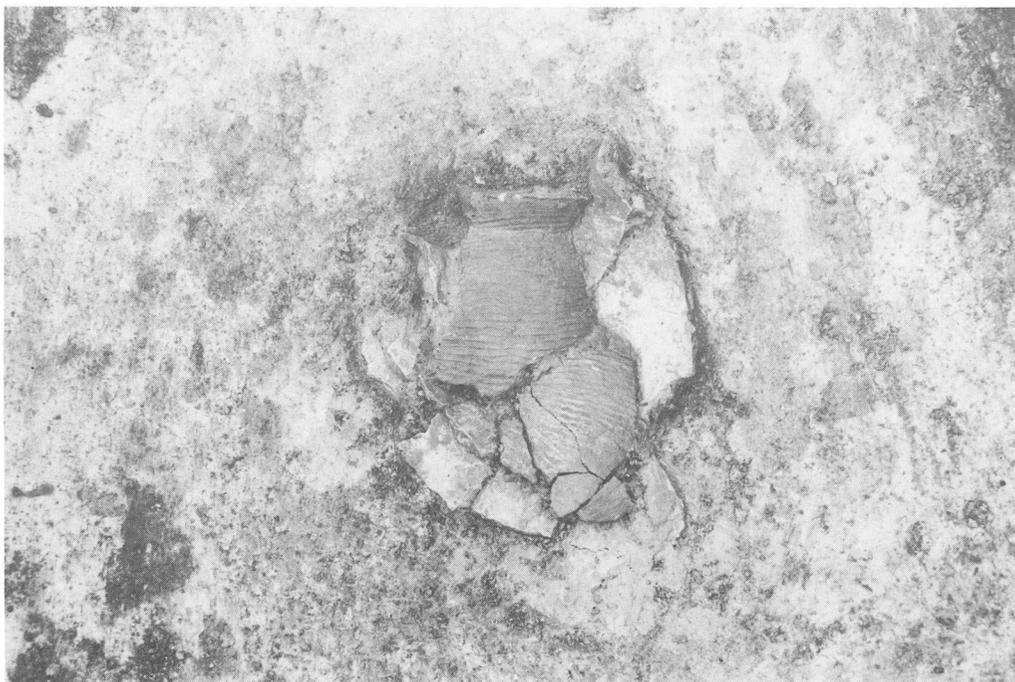
S T 2 遺物出土状態 (北より)



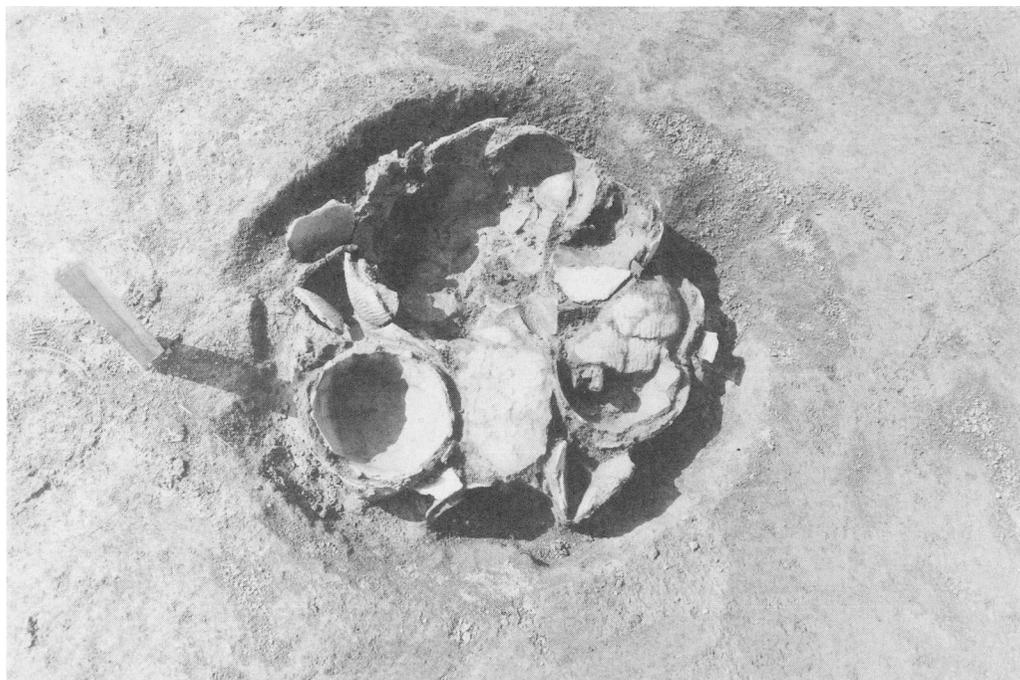
S T 2 遺物出土状態



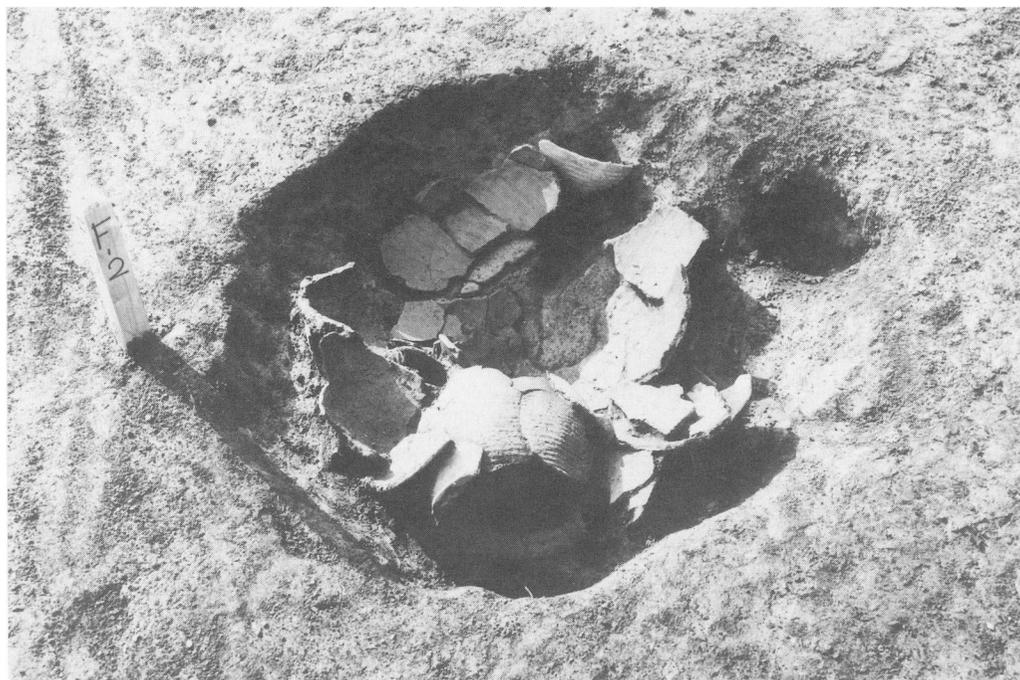
S T 2 遺物出土状態 (東より)



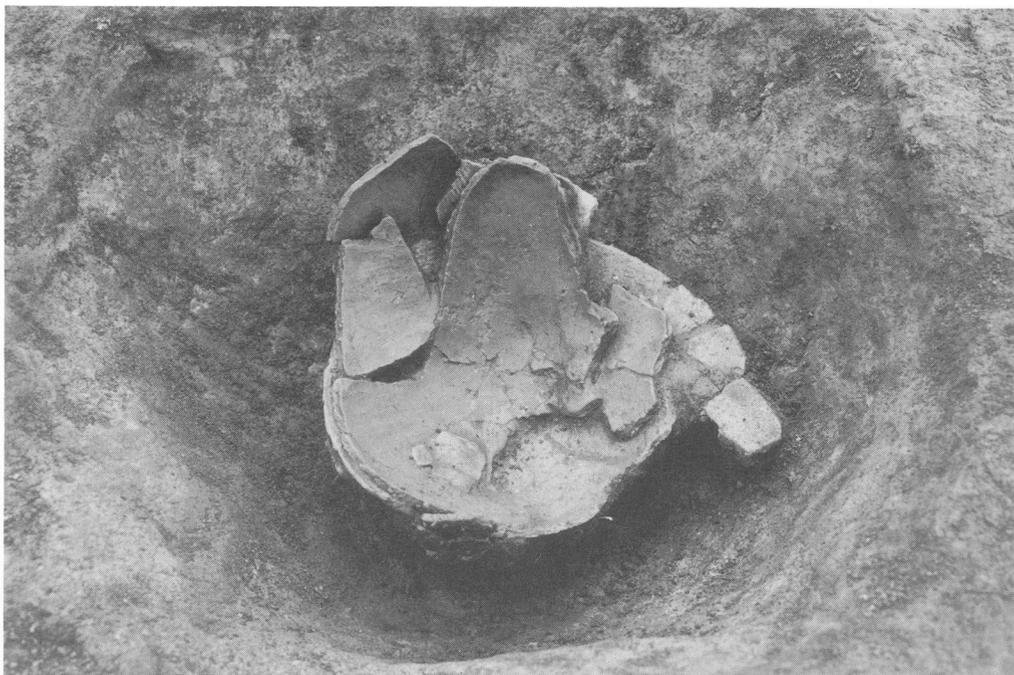
S K 1 遺物出土状態 (東より)



S K 2 遺物出土状態 (南より)



S K 2 遺物出土状態 (南より)



S K 2 遺物出土狀態



S K 4 遺物出土狀態



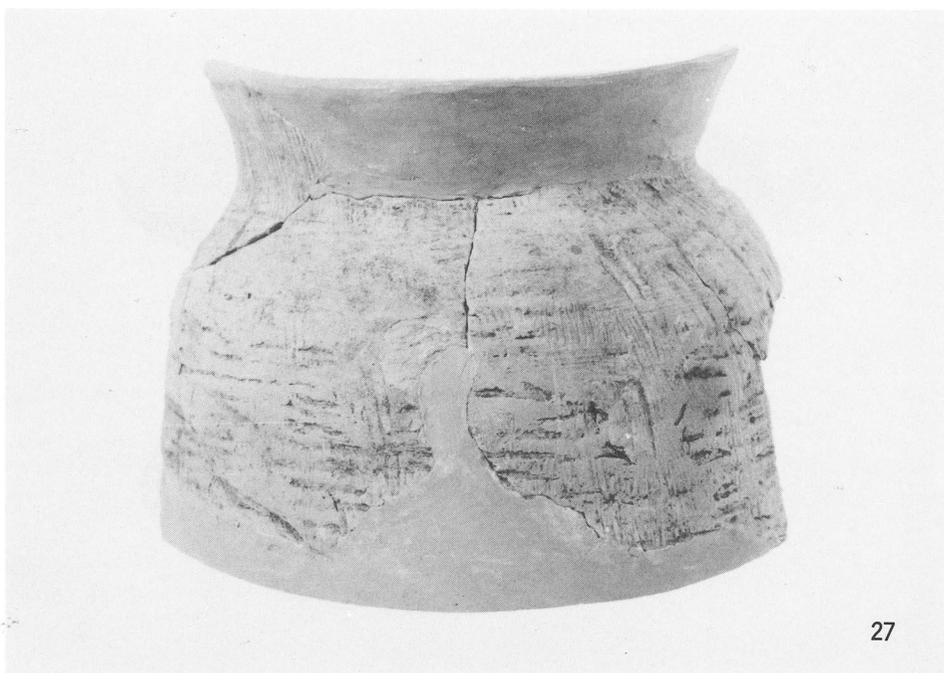
ST 1 出土遺物



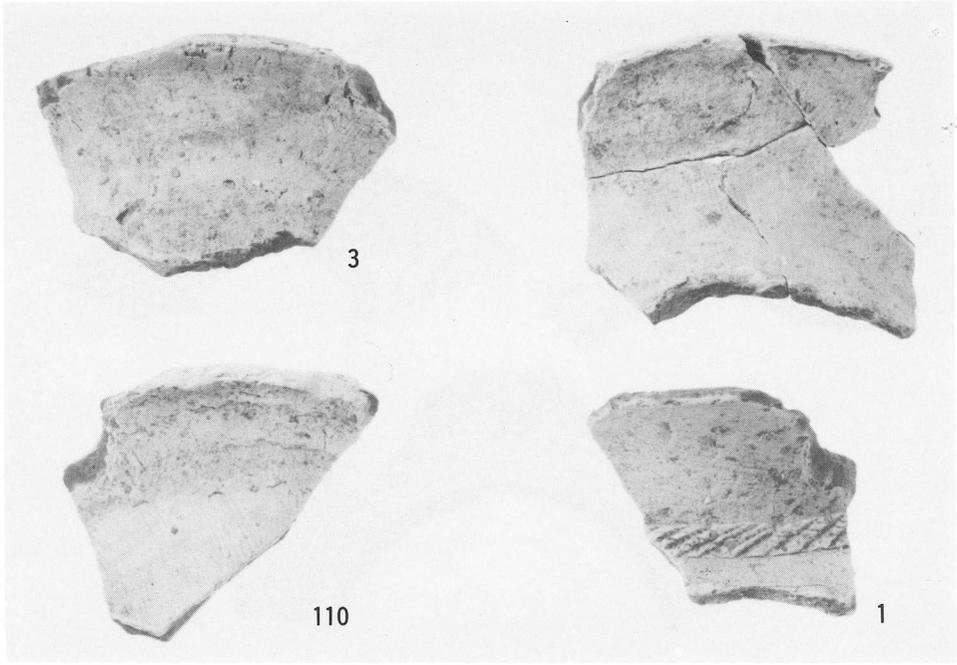
ST 1 出土遺物



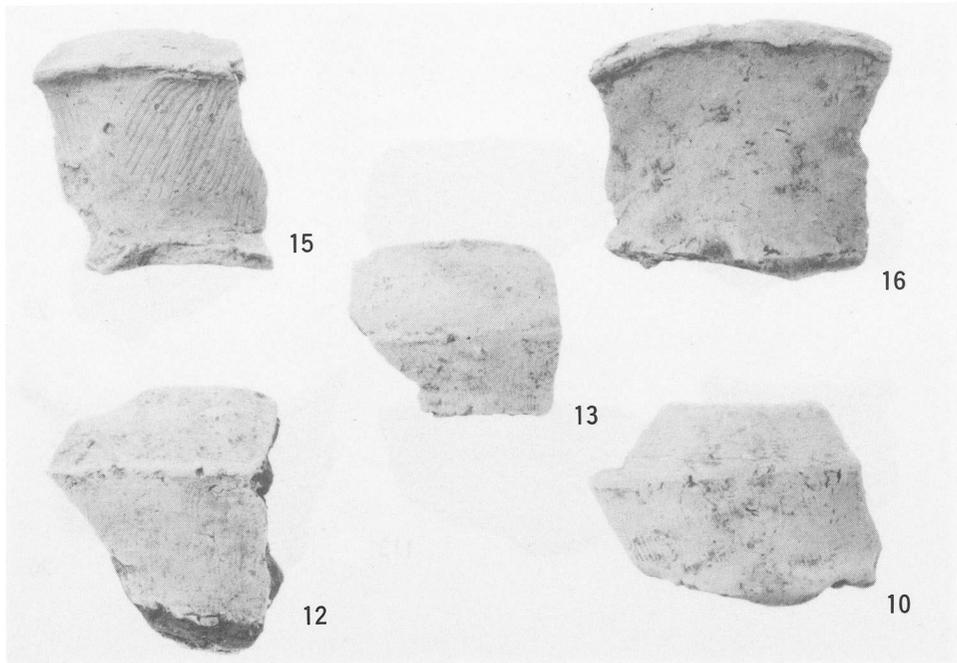
S T 1 出土遺物



S T 1 出土遺物



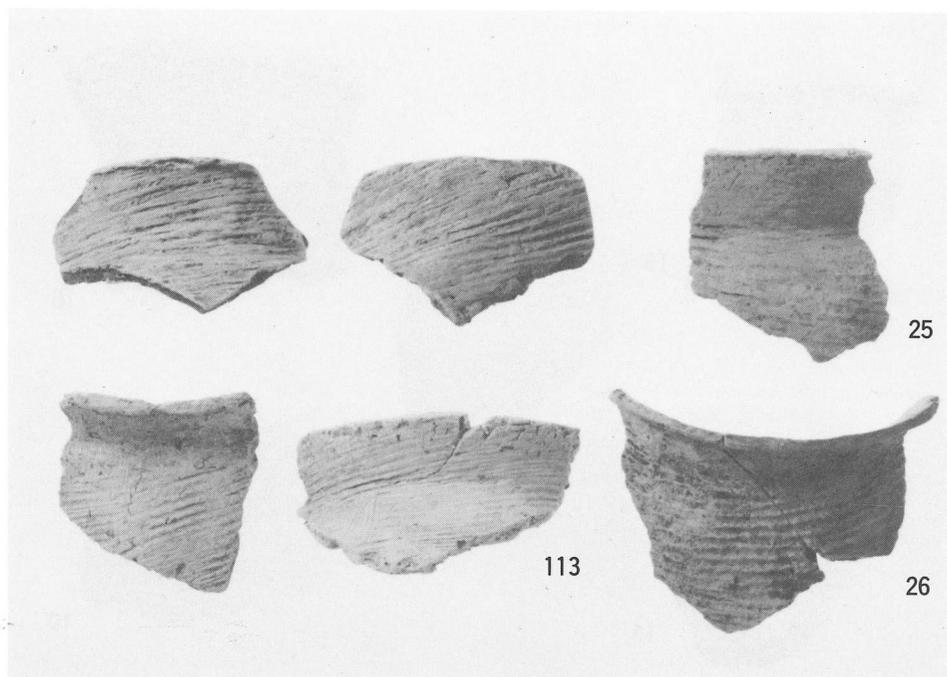
S T 1 · 2 出土遺物



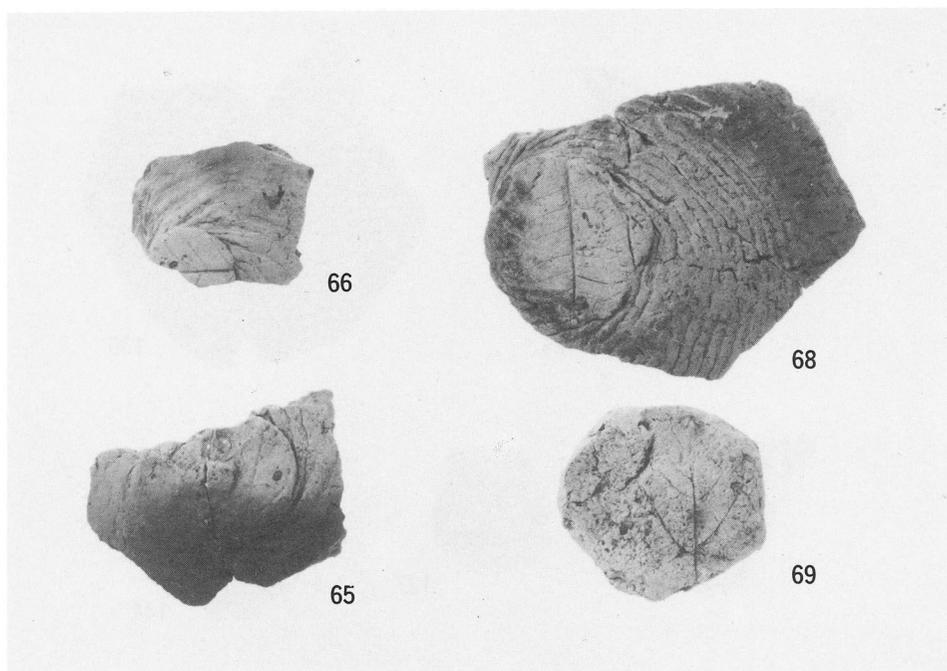
S T 1 出土遺物



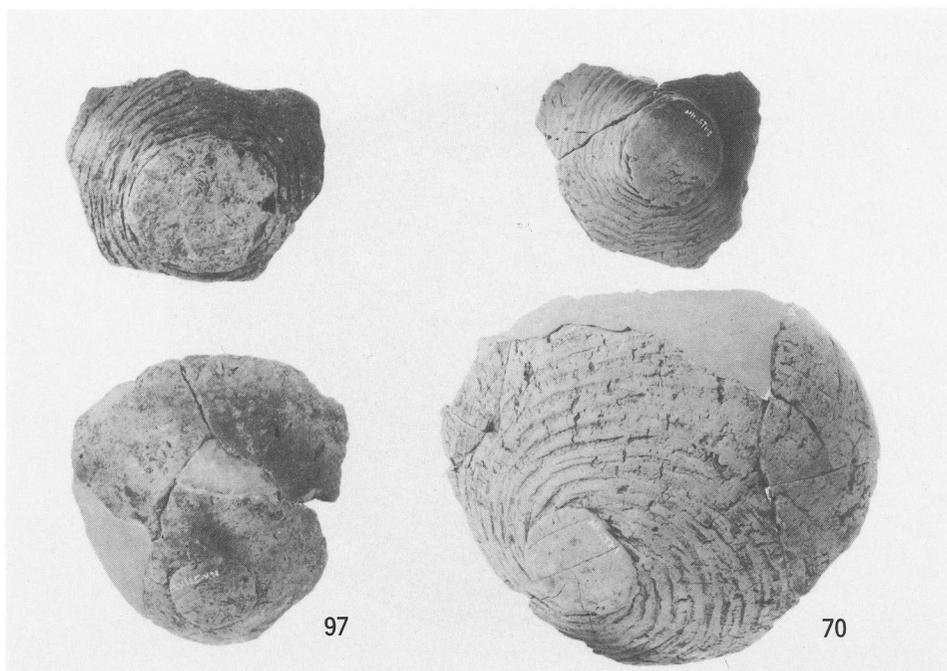
ST 1 出土遺物



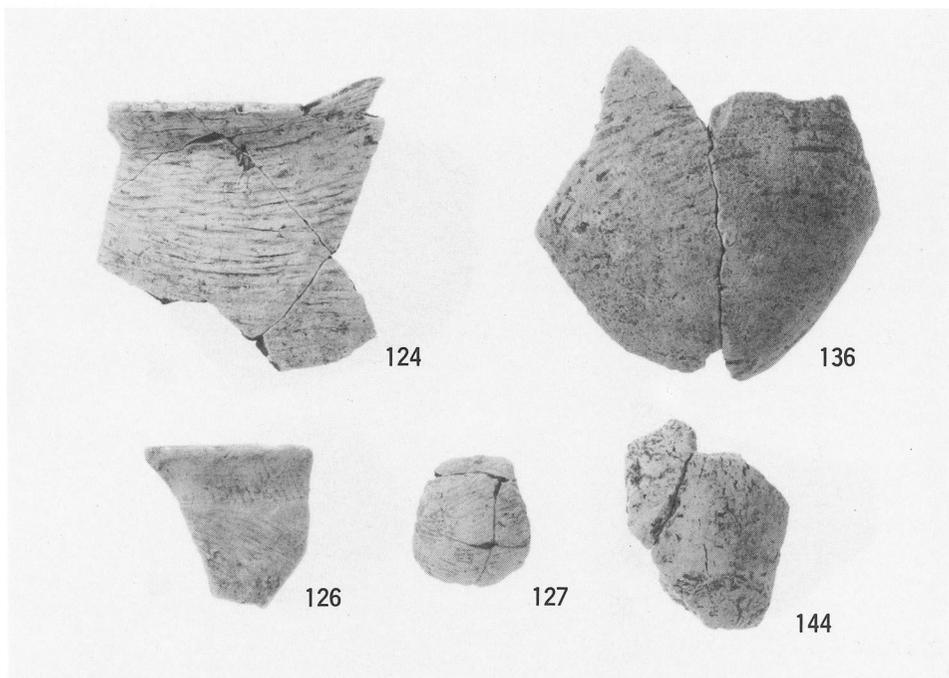
ST 1・2 出土遺物



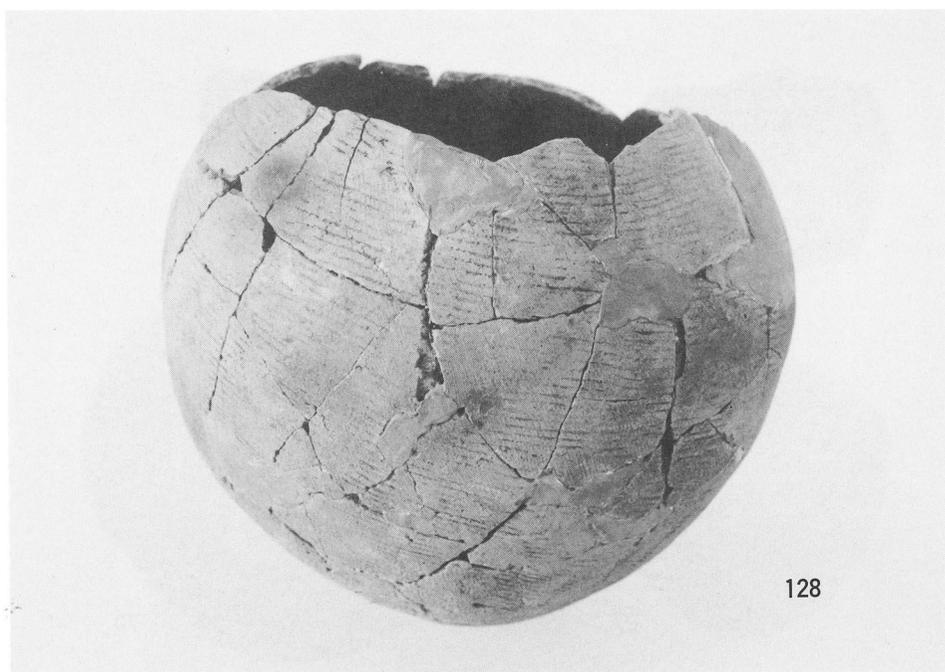
S T 1 出土遺物



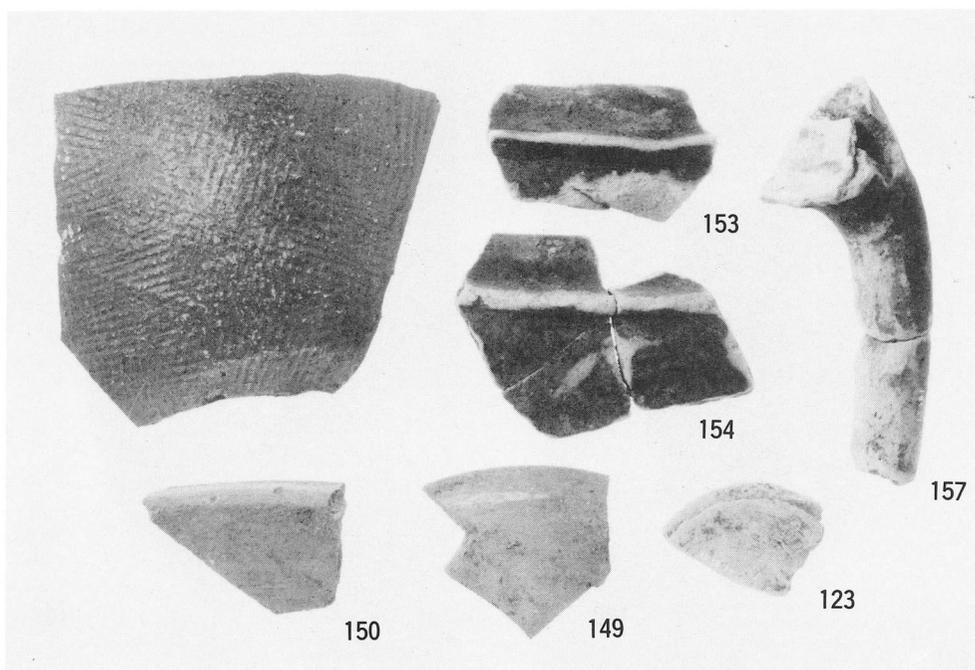
S T 1 出土遺物



S K 1 · 2 · 3 出土遺物



S K 2 出土遺物



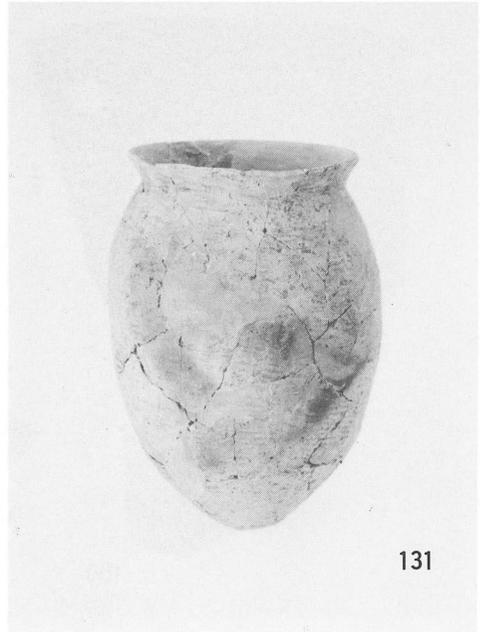
S B 1, S D 1 出土遺物



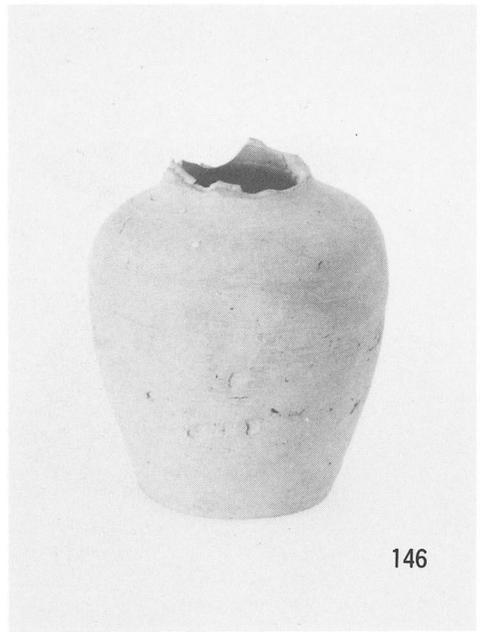
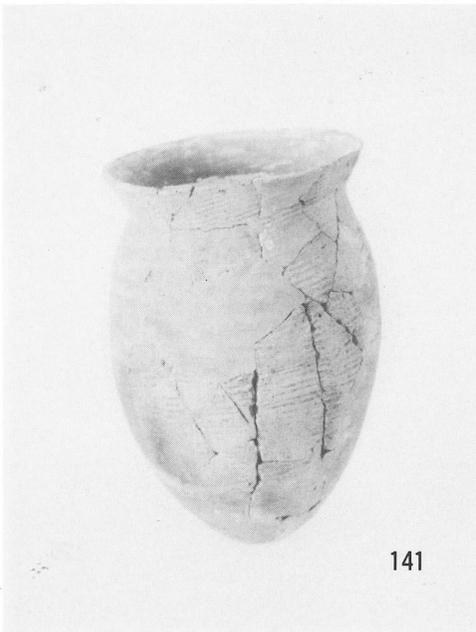
S T 2 出土遺物



S K 1 出土遺物

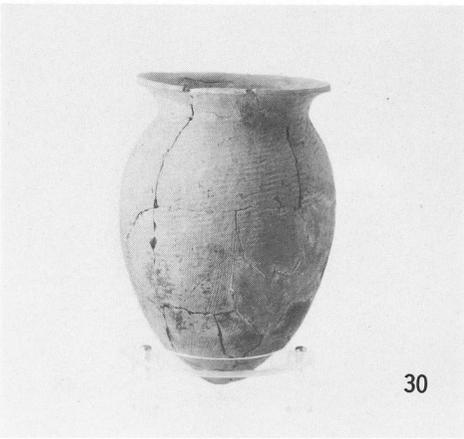
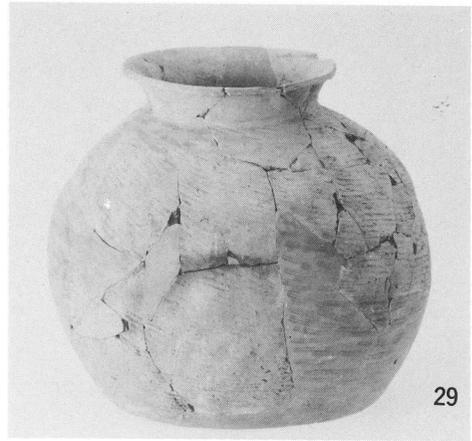
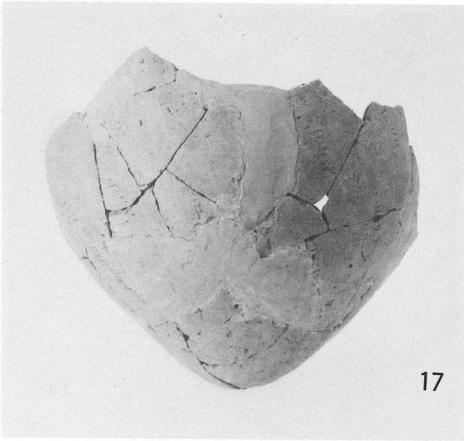


S K 2 出土遺物



S K 3 出土遺物

S K 4 出土遺物



S T 1 出土遺物